

験して器械なり工藝なりの上に其學說を事實にするといふと、初めて其處に偉大なる力となつて、世上に效益を興ふるに至るのである。佛敎の妙味は學問でもなければ、單に哲學の講義でもない、宗教的大威神力を現はすのであるから、信仰を以て第一とする次第である。福間氏の如きも佛の詮義立をしたり、慈悲の學說を研めんとしたならば、到底佛の慈悲を感じずることは出来なかつたに相違ない、故に互に平生から宗教的の方面に向つて精神を養ひたてゝ行く、遂には精神上に事實にされて、大安慰を得ることが出来るのであるから、病者と健康者の別なく平生に法縁を結んで宗教に親しみ自己の精神を養ふて行くことが最も肝要な事であると思ふ。

二九 茶後閑談

▲足元を見よ

蓮如上人の御一代聞書と申す書物の中には、實に修養の心得になることが澤山ありて、自分の常に愛讀する所であるが、試に其二三に就て話して見よう。

「行さき向ひばかり見て、足元を見ねば踏みかぶるべきなり。人の上ばかり見て我身の上のことをたしなまずば、一大事たるべし云々」

と云ふ事が書いてあるか、之れは何んでもない事の様であるが、實に大切なことである。互が道を行くに、向ふばかり眺めて居ると、自分の足下には何があつても分らぬ。石に躓いたり溝に落ち込んだりする危険がある。又自分の事を棚に上げて、他人の事ばかり見て居る時には、兎角失敗に終るものである。今日の青年が、一も成功二も成功と、自分の勤勉努力といふ原因を考へずに、徒らに成功といふ結果だけを見て突進せんとして失望するのは、之が爲めである。成功には成功の原因、素養といふものがある。其道程には、苦辛慘憺の奮勵といふが伴ふて居る。それを一足飛びにでも達せら

るゝ様に、只僥倖を希望して、向ばかり眺めて居ては、到底達せらるゝものではない。斯の如くして成功に憧るゝものは、遂に途中で斃れてしまふ。天は下不如意の嘆を發して失望の淵に沈んでしまふのである。そこで我々は常に足元に氣を付け、自己の實力を養ふて一歩々々漸進して行くといふことが肝要である。

又我々には他人の缺點は能く分るが、自分の缺點には氣が付かず、自分の缺點を棚に上げて、兎角他人を非難したがるものであるが、之れも大に注意すべきことである。人の善行を見れば己れも之に倣はんことを勤め、人の惡事を見ては之れを己れの誡めとするといふ心掛がなければならぬ。之れは但に世間の事ばかりではなない。宗教の上にも同じ事である。彼人は無法義であるとか、此人は行狀が修まらぬとか、随分他人の懈怠は責めもするが、自身の上にも顧みないで、後生の一大事も一向嗜まない様な人は、非常な場合に臨んでは、狼狽せねばならぬ。凡そ信仰といふものは、能く自身の

無價値を自覺するのが其第一歩で、佛の有難い方ばかり眺めて居ては信仰に入ることとは六かしい。即ち自己を顧れば缺點だらけの凡夫である。どう考へて見ても頼みにすべき一物を持たないといふ事になつて、始めて如來無限の慈悲が感得せらるゝのである。そこで死期に際しても平和満足の際に遊ばるゝ様、平素から自身の足元手元を顧みて、後生の大事を嗜む心掛が大切である。

●●●●●
▲●●●●
●●●●●
●●●●●
●●●●●

同御一代聞書に又斯ういふ語があります。

「人はあがり／＼て、おちばを知らぬなり。たゞ慎みて不斷そらあそるしきことと毎事に付て心をもつべし云々」

兎角人間は調子に乗つて上へ／＼と上つて行き、其落場を知らぬものもある。此落場を定めておかずして、調子に乗つて行くと、どんな破目に陥るかも知れぬ。實に空恐ろしきことと思ふて、不斷何事に就ても慎む心掛が

大事である。近頃の成上り紳士や俄分限者が己れの分限をも忘れて、衣服飲食や淫靡な生活に贅澤を盡すが如きは、大に反省すべきことである。日常の生活にしても、各身分相當の事をして置けば宜しいけれ共世の中が段々贅澤になりて、即ち調子に乗りて己れの分限をも辨へずに贅澤を盡す様になつたのは、實に空恐ろしいことである。此空恐ろしいといふ觀念が最も我々には必要なこととて、孔子が天命を畏ると云はれたのも、此事で我々の上には常に我々を支配する天道がある。此天道様が常に見て居らるゝから僻事は出来ぬことになる。佛敎で申せば我々以上に佛がまします。我々が如何なる事をして居ても、善事も悪事も佛は悉く之を照覽して居らるゝから、たとへ人が見て居らずとも聞いて居らずとも、此佛の冥見に對して畏れざるを得ないのである。此心あれば萬事に仕損じがなくして身を慎む事が出来る。衣食住に就ても自身の力で得た金であるからと思ふて、無暗に贅澤をすると、つまり自分の徳分を消す事になる。自身の受けた徳分を

無暗に無くしてしまつては、自身の落場のみならず子孫の落場がなくなる譯である。親としては子孫の落場をも考へて遣なければならぬ。何事に付けても空恐ろしいといふ心を持って如來の慈悲佛の恩恵を思へば、自分の財産だからと云つて無闇に贅澤してはならぬ。自分の徳分を世の慈善公共事業などにも投じて他人にも分け又子孫にも残す様に心掛れば、自身も盡きず子孫も從つて繁昌すべき筈である。兎に角我等は常に佛の冥見に畏れかしこみて、言行を慎むやうにしたいものである。

▲心得たと思ふは心得ぬなり

又同書に

「心得たと思ふは心得ぬなり。心得ぬと思ふは心得たるなり」

これは我々の自負心や慢心を戒められたので、我々が何事も心得て居る物の道理を能く合點して居るなど、思ふは其實心得て居らぬのである。我々は小なる知識や経験を鼻に掛けて、大した物知の様に思ふけれ共宇宙

の大に比べて實に大海の一滴である。又所謂理外の理といふこともある。世間の識者學者が宗教を迷信などと呼ぶのは、己が小智小經驗から割り出して宗教を議せようとするからである。特に青年時代は自負心が強くして、凡て世の中の事を獨斷的に考へて、何事に就ても得手勝手な議論を吐たがり、又大膽にも凡ての問題に就て間違た解決を與へんとする傾きがあるが之れが青年を誤らす基となるのである。それ等の小理窟は一應は最も多ののであるが、一段上の經驗知識を有する人より眺めると道理でない事が多いのである。即ち心得たと思ふは其實心得ぬことが多いのである。されば何事でも自分は充分心得ぬ者と思つて、先輩や識者に相談をするが善い。そうすると比較的失錯過誤を招くことは少なくなる。即ち心得ぬと思ふて人に相談し、教を受けるのが却て心得た譯になるのである。信仰上の事も其通りで、唯一通り心得た積りては行かぬ。常に法縁を結び、聽聞を怠らぬやうにするが善い。常に信仰の相談をする人が眞實に信仰の味ひ

を知つた人で、自分は天下の大導師の如く信仰を鼻に掛け、他の説教は聞かぬてもよい、相談せんとも善いと思つて、自惚れて居る人の信仰は却て覺束ないものである。信心は聞けば聞くほど味のあるものであるから、時々信心の溝を浚えて如來の法水を流すやうに務めねばならぬ。

三〇 善縁に近づくべし

余は今より十年前京都に住居して居た時は、毎年元旦を迎へる毎に必ず百八の鐘聲と共に早起して本山の兩堂に詣り、其勤式の席に參拜したことであつたが、馥郁たる沈檀の香、悠揚たる梵唄の響は、余が身心を清新ならしめ、一種云ふべからざる快感を與へたものであつた。故に此の快感は、今に余が胸裡から忘れ去ることが出来ないのである。陳善院僧僕師には、元旦祖堂に詣するの詩がある。曰く、

金界烟霞曙。寶林梅柳春。焚香瞻聖相。列燭拜光輪。仙梵隨風遠。

天花帶雨新。何期將薄劣。逢此瑞華辰。
又別に一詩がある。其は、

樓鐘報曉法門開。緇白拂煙朝梵臺。銀燭光迎初日照。金爐氣入和風回。
臘水纒液瑤池水。宿霧猶籠紺苑梅。更喜真乘被四海。欲歌盛德慚庸才。
と云ふのである。此の二首はともに中腹兩聯合璧で、誠に能く本山元旦の
光景を言ひ盡してある。余も元旦に參詣した時は、眞に此の詩に現れて居
るやうな心地がしたのであつた。然るに一度東京に移住してから以後は、
既に十回も元旦を迎へるのであるが、未だ一度も此の如き感がしないので、
余は如何にもして今一度此の感を惹き起さうと思つて、毎年元旦には早起
して佛前に點燈し焼香して正座するが、一向往年の快感は起つて來ぬ。其
れ故十年此の方の余には、元旦と雖も少しも身心の上に清新の感が生じな
い。即ち元旦と云ふ一年の換り目が、余が身心の修養上には何等の價値も
ないものになり畢つてしまつたのである。洵に口惜しい次第である。

余は情ら思ふに、是れと云ふが畢竟居が氣を移すと云ふ所からかやうに
なつたもので、佛敎の語で云へば縁の異るところから感想が従つて異つて
來たものであらうと思はれる。佛敎では此の縁と云ふことが非常に重く
見られて居る。たとひ如何なる因があつても、縁に逢はなければ果報を生
ずると云ふことは出來ぬとしてある。また其の縁も只手を空しうして待
つて居たのでは決して來るものではないから、此方から進んで求めてかゝら
ねばならぬ。彼の信仰の如きも、一度の聞法で忽ち心華開發して獲信する
者もないではないが、一度よりは二度、二度よりは三度と云ふやうに數々席
を重ねて法縁を結ぶことにしなければ、決して向上し純熟すると云ふこと
は出來ない。されば蓮師も御文章の中に「大略信心を決定し給へるよし聞
えたり、めでたく本望これに過ぐべからず。さりながらそのまゝ打ちすて
候へば信心もうせ候べし。さいくゝに信心の溝をさらへて彌陀の法水を
流せといへる事ありげに候。」と仰せられたのである。余はさきに場所が

變つた爲めに以前のやうに感想がすこしも起らぬやうになつたと云つたが、之は實に元旦の感想のみに限る譯ではない。萬事が皆斯様の次第である。故に信仰や修養の上にあつては、縁を擇ぶと云ふことが最も大切なこととてある。即ち惡縁を去つて善縁に就くと云ふことが最も肝要なことである。故に善縁を擇んで之に近づくことは、決して忽諾に附すべきものではない。

其れに就て思ふのであるが、今年には干支が戌に當つて居る。此の干支の戌も用ひ方によつては一種の迷信となつて世の文運の發達を妨げる悪因となるが、之を程よく用ふれば修養を計る上に於て一箇の善縁とすること出来る。即ち戌は犬である。犬は一疋の畜生に過ぎないが、己れの職分を能く勤めると云ふ點は實に感服の至りである。試みに思へば、犬は一度畜養はれることとなつて其家に至れば、たとひ主人が與ふべき食物を忘れた爲自分は饑餓を感ずることがあつても、また主人の子供等の惡戯から咎な

くして自分は打擲の憂き目に合はされることがあつても、決して怨むなどと云ふことはなく、いつもの如く平然として終夜警護の任務を盡して居る。而して犬は此の夜警をするにしても、淺ましい或る人間のやうに賞與に預らうとか報酬を得やうとか思ふ野心があつてするのではなくして、是れは自己が命ぜられたる唯一の天職であると思つて居るかやうに常に表裏の隔てをせず、忠實に其の任務を盡して居る。また吾人は能く新聞等て犬が養主のために急を報したとや、主人の小供の難を救ふたなど、云ふ實例を見ることがあるが、是等の事柄を見聞すると吾人が居常傲然として、我れは萬物の靈長である。など、云つて威張つて居るのが何となく耻かしいやうな感がする。吾人は此う云ふ場合には、犬の其の夜警に忠實なる邊を願ひ、又犬の恩を知り、義を行ふ邊を思ふて心に留むるやうにすれば、其れが即ち主人に仕へ世人に交る上に於ける自省の好縁となるであらう。尙ほ、吾

人は此の心掛を單に犬の上のみに止めずして萬事萬端に應用し、以て自己修養の資に供したならば、遂には修養が積めた結果彼の宋て名高い蘇東坡のやうに、溪聲を法身佛の廣長舌と聞かれ、山色を法身佛の清淨身と拜まれるやうになれるであらう。

三一 先哲の遺墨

▲先哲の遺墨

先達て、築地別院で催された龍谷會の東京諸學校新入學生歡迎會には、席上に眞宗先哲の遺墨を展覽したので、余も所藏のもの七八幅を陳列したが、諸方から集まつたものを合すると四五十幅の多きに及んだ。中て一番珍しかつたは、空華三師即ち明教院、快樂院、淨信院の書翰の合装したものであつた。此三師中明教院のは諸方に少しはあるけれども、快樂淨信兩院のは誠に稀なものである。其れ以外に珍しかつたは居敬師の七律の草書であ

る。同師は『清流紀談』にも其略傳が載つて居て、人も知る如く明教院の門下で築地淨立寺の住職彼の三業惑亂の時非常に與つて効蹟のあつた人である。師は漢籍に達し、詩文は勿論筆蹟も至つて見事であつた。此外石泉師寶雲師の幅も珍しかつた。當日余が陳列した藏幅は、桃溪師の五律一幅、月笠師自筆の法讚錄序僧撰師の草書智暹師及び智洞師の一行もの、大瀛師の草書石泉師の鳥の畫讚及先哲遺芳と云ふ張り混ぜの横卷等であつた。

▲月笠師の法讚錄の序

此日余に席上先哲に就いて何か訓話を述べよとあつたので、月笠師の法讚錄の序に就いて話したことであつた。其序と云ふは、

法讚錄序

月笠謹誌

噫、擅矚之○也。實士農之汗血、工商之髓肉矣。雖片昏粒穀、○迷廬之量○無思漫受用乎哉。是故日々檢此錄、讀經誦念、須鄭重焉。若不然、恐當來被毛戴角之債報多劫、無休期也。可不慎乎。

と云ふのである。此序に依て見ると、法讚録は師の自著であつて師が平素讀經誦念等に就いて心掛けを誌し、旦夕讀んで自ら反省せられたものらしい。一體僧侶たるものは、檀徒の信施を亂りに費してはならぬ。例ひ一昏一粒の微と雖も皆是れ檀徒の汗や膏て出来たものでないものはない。別に之と云ふ職業も營まずして檀徒の信施を受け、大寺に樂々と暮して居ると云ふが一般の僧侶であるが、能く考へて見ねばならないことである。是等の信施を受けるのは、餘ほどの大徳家ならばいざ知らずであるが、受くべき其資格なきものにして、徒らに信施を受けて居るのは、之れを喰へるなら、丁度胃の極めて弱い者が、多量の食物を喰へたと同様で、後に非常な苦しい思ひをせねばならぬ。依つて僧侶は、己れ菲徳なるに、而も此信施を受け居るを顧みて、常に白毫の恩恵を思はねばならぬと云ふ意味を書かれたものである。此月筌師は、元來大阪天満の定専坊の住職で、宗餘乘共に造詣深く、殊に宗乘の方では、仲々効績のある人であつた。其著「正信偈刺説」及び「真

宗關節は、何れも宗學上大なる裨益を與へた書である。余は何時も話すとてあるが、當時桃溪師が學林の能化であつて、其の著された「正信偈文軌」が、宗學上に大發達を遂げしめ、此書からして、眞宗の宗學が立派に理論的に研究せられるやうになつたのである。此師は元來、他部では特に天台に達して居られたから、従つて文軌は天台の學から裝飾せられて居た。然るに今月筌師は、餘乗では華嚴に深かつたその著「正信偈刺説」は、宗學を華嚴の學から説明せられたのである。故に此二書が共に宗乘に光彩を與へたことは、恰も高く中天に輝やく日月を仰ぐの觀がある。刺説の他、月筌師の著は澤山あつて、共に師の豊富なる學解と卓抜なる見識とを表して居るのであるが、師は常に學問見識はかりに秀てた人でなくして、又、非常な道徳家であつた。其は「清流紀談」を見ても、大略は察せられることである。師が曾て定専坊の住職を辭せられる時、云はれた辭に、「自分は在職四十年の長きに涉つたが、其間住職としての責務を空しくすることはなかつたかど、日々薄

氷を踏むの感を抱いて居ない日はなかつたが、今日からは愈此大責任を他人に譲つたので、眞に重荷を卸すの思をする。と云はれたと云ふことである。併し師は爾來所謂樂隱居の生活をする。と云ふのではなくて、華藏會と云ふ會を創め、毎月日を定めて法義相續を營まれた。そして今も残つて居る其會の規則なるものを見たが、いかに師の企だてられた其會が、眞實な熱心な會であつたかと云ふことが明らかに推察せられたのである。

▲峻諦師の感衣食文

扱て前述した法讚録の序から思ひ出すは、余が先年越前三國に行つた時、同地の先哲峻諦師の「感衣食文」と云ふのを見、早速謄寫させたことである。此文がまた、月笠師の法讚録の序と能く似て居つて、實に服膺すべき文字であつた。左に掲ぐるもの即ち其れである。

夫雖生涯須臾、雖一身至眇、活計難成、資産難至、士農工商孰優、然都鄙海陸常役々、雖然如是、尚苦飢渴、嗚呼、緇衣之類、何顧預素殮乎、山僧每至、施主家非未

曾大息焉、且夫檀信之諄々也、不問智愚、不論長幼、至頑愚暴惡、僧胡跪慶迎、渴仰招請、山澤之產、選精味耕耨之物、獻最華、飲食衣服之具、悉稱御、起居瞻望、如君如父、纒吐一言、唯然銘肝、少有所勞、愀然巨忘、至其餘食殘滯、合家競分、其響鑿之深、志何得具述、且醫師應招、愈病也、匠師得喰、建屋也、各有其材、各得其資、無其材而欲得資、豈可得乎、嗟呼、吾儕有何能、空復高心不辨一字、逞名利於胸臆、倍愛着於世俗、飲燕達夜、戲哢度年、輕佛欺法、飽嗜滋味、恣耽好色、信施如塊、不顧法財、如礫無察、至糧盡債重、則誣信施如貢稅、責多少如酷吏、少趣請則勃然、忽瞋、感爾甚厭、大面大言、見施主如奴婢、且蠶婦夙夜勸勞、猶乏懸鶉、農夫春穉辛苦、更窶黎羹、嗟呼、吾儕有何恩、復錦繡溫衣、列嘉肴飽食、雖澆季、何其甚乎、古謂荷耒日當午、汗滴禾下土、誰知盤中殮粒々、皆辛苦、貽語後生、庶幾思之、庶幾思之。

峻諦師は知空師の門下で、大經の會疏を著した學者であつて、又觀音を畫くに妙を得、其筆致は殆んど支那人の畫いたものかと疑はしむる程であつ

た。加之德行が高く、平素奇瑞が現れたとか、時人は師を以つて観音の應化身と云つて居つた。此人の逸事は今に該地方では少し傳へられて居るのである。

前に掲げた文は文章としてはさまで立派なものとは云へないか知らんが、文意は月笠師の法讃録の序と同じで、之を一讀すれば當時の僧侶の無禮の狀態が目前に見えるやうな感がある。是では成程情緒落して居た當時の僧侶を、世人が毒蛇の如く憎悪したのも決して無理からぬことと思はれる。併し今日では僧侶に對し、世人も斯の如き感を抱かず。僧侶もまた、當時の如き放逸無殘なものとは比較的少であらう。併し僧侶の子弟たるものは、一般の子弟と違つた所があると云ふことを思ふて勉強もし修養もしなければならぬ。今日僧侶の子弟の東京に留學するものは、悉くとは云はれぬが、多くは其學資を檀徒の信施から仰いで居る。して見ると、其子弟たるものは深く其所に注意せなければならぬ。他人の膏血をしぼつて學問

して居るものは、他の資産家の息子と同様に、衣食其他に就て、亂りに贅澤を極めてならぬは、勿論學業の遂げられた上に於ても、檀徒に對する義務の觀念を忘却しては實に濟まないことである。檀徒は何の爲に學資を貢いだ。一には佛法の興隆のため、二には自他が共に未來の救済を仰がんとするために外はない。然るに僧侶の子弟が其を忘れて、若しも世間の名聞利養にのみ耽つて、唯、僅かに自身一人の位置を作り、衣服飲食の贅澤を貪らんとしたならば、一には佛祖に對し、二には檀徒に對して、誠に何とも申譯ない次第であるから、東京在留の僧侶子弟諸君別しては、學生諸君には、此所一番反省して貰ひたい。

先哲の遺訓

▲法霖師の對食偈

前號には月笠師の法讃録序と婆誦師の感衣食文とに就いて話したこと

であつたが、之に就いて憶ひ起すのは法霖師の對食偈である。是れは従前にては眞宗の僧侶は如何なるものも皆諳んじて居たものであるが、現今の青年諸子は多く知らないやうであるから、今之を紹介しやう。

粒々皆是檀信。滴々悉是檀波。非士農。非工商。無勢力。無產業。自非福田衣力。安有得此飯食。慎莫問味濃淡。慎莫論品多少。此是保命藥餌。療飢與渴。則足若起。不足。想念化爲鐵丸銅汁。若不知食來由。如墮負重牛馬。寄語勸諸行者。食時須作此言。願以此飯食力。長養我色相。身上爲法門。干城下爲苦海津筏。普教化諸衆生。共往生安樂國。

之を熟讀すれば、實に嚴父の前に訓戒を仰ぐの感がする。動もすれば尸位素餐に流れんとする今日の僧侶は、食前必ず此偈を一誦するの必要がある。

此法霖師は學林第四の能化で、宗學上に功績のあつたことは人の皆知る所であるが、師は又文學にも堪能であつて、古來眞宗學者中、世間に文學の名

の著はれて居るは、師と桃溪師の二人のみである。師の名は『書畫人名錄』にも載せてあり、又新井白石の『停雲集』にも、師の詩二十首、桃溪師の詩十二首が選出せられてある、而して法霖師の注に、

法霖字元澤。東武人。本性小野。初名虛卿。號蘭谷。家資千金。不肯以生產爲心。性耽文字。好蓄奇書。有兒尙幻。出妻獨處。唯一僕一婢。之老者。委以家事。年既壯。去家爲僧。放浪于雲水之間。正德辛卯夏。年三十八而寂。

とあるが、之を『清流紀談』『龍谷講主傳』等に對照するに殆んど別人の感がある。併し『停雲集』所載の詩を『日溪詠録』と對檢するに全く同一であるから、決して別人ではないであらう。余の『先哲遺芳』卷の中に收むるものは、師の自筆に係る詩稿の斷片であるが、之は皆『日溪詠録』及び『停雲集』に載つて居ないから、因に此に録して置かう。

慰南麟子臥病於江南

伯牛曾有疾。執手宣尼哭。此事二千秋。至今存簡牘。磯浦南麟子。抱病在幽谷。俊

逸驚鄉閭。聰敏涉支竺。人稱一逼照。河南共推轂。甚憐子多病。滯此簷林馥。秋晚潭水清。雨霽山容減。寒汀渡歸鴻。荒庭亂淺菊。想得胸磊砢。莫與世碌々。鴨川川上樓。相望感落木。唯有天人師。終是爲子福。

送寥天歸南歸

錫去京華道。舟移浪泊城。別後好傳信。歸鴻寂有情。

又

行々泉與攝。掛衲向鄉山。白日雲偷徑。迢々白鳥關。

師の遺墨は極めて少い。今夏岐阜船橋氏て書翰二三通を見たが非常に珍しかった。

▲桃溪師の遺墨

桃溪師は法霖師に比すると、其遺墨が頗る多い。書もまた上手である。詩は『桃溪遺稿』と云ふのがあつて世に行はれて居る。白石の『停雲集』に其詩の載つて居ることは前に云つたが、尙ほ三宅觀瀾の文集に『送若霖師序』と云

ふのが一首ある。極めて其人となりを推賞してある。今夏余が備後の府中に遊んだ時、倉光村明泉寺住職蒲生敬信氏、暑中遠路にも拘はらず、余に其所藏の桃溪師の遺墨を示さんとて四五幅を携さへて來られた。其内に一幅二河白道の長篇があつた。書も極めて謹嚴落款に二つの方印が押しあつた。一體師の書は多く無印であるのに、右の幅に限つて印があつたは甚だ珍しかった。氏の話に、寺には尙ほ桃溪師の書屏風が一雙ある。先代の僧が桃溪師の門人であつたに因つて、斯く師の遺墨を多く持つて居るのであると云ふ。余も二小幅を藏して居る。一は五律、一は書翰である。五律は即ち斯うである。

遊玉手山

曳藤登玉岡。憐此發天藏。花落無人逕。翠靄遊子裳。日永芙蓉箭。雲

深薛荔衣。往往和招隱。磬聲送夕陽。

次に南播智暹師の遺墨も、是亦甚だ少いものであるが、余は先年高階海量

君から一幅を恵まれて珍蔵して居る。「象王行處絶狐蹤」と云ふ一行物である。其意氣の盛なること想ふべしである。之は本尊義諱論の際揮毫せられたものらしい。因て余は一絶を題した。

象王行處絶狐蹤。暹老遺書墨色濃。憶得當年本尊義。堂々意氣壓眞宗。

▲僧樸道粹、泰崑師の遺墨

其から彼の「眞宗法要」を校正せられた粹、樸崑の二師の遺墨も、余は五六を藏して居る。就中僧樸師は詩文も好く書も妙である。余が所藏の幅は、遊光通寺の五律である。

重々青障際。寺掩白雲扉。古佛洞中坐。玉龍洞底飛。巖鳴靜夜梵。霧

合靄朝暉。似入天台路。相逢羅漢歸。

師は詩も書も明人の風格がある。此外に功存師に贈られた書翰が一通ある。之は「先哲遺芳」の内に改めて居る。余は昨夏越中高岡に遊んだ時、吉田哲雄君の寺で所藏の屏風一雙を觀た。草書で、秋風辭を大書してあつた

が頗る見事であつた。又師の詩文は別に之を集録したものがある。曾て佛敎大學の書庫にあつたのを觀たが、詩文共に皆巧みなものである。中て今に記憶するものが五六あるが、茲には略して置く。道粹師も詩文共に好い。是れまた佛敎大學には詩文の集録がある。余は師自筆の五律一篇を持つて居る。之も「先哲遺芳」中に收めた。書も淡泊なる風韻があつて誠に好い。その五律は、

樸公尊者同廣岡信士。暫還久寶之廬。小徒天授奉鉢而從焉。卒賦一律以擬贈言。

十月江南地。送師天氣晴。早梅先艷景。殘菊尙欣榮。鉢在均提執。船

因須達迎。白雲無住着。何厭寶房清。

右、僧樸道粹二師の遺墨は從來處々て之を觀たことがあるが、泰崑師の遺墨に至つては未だ曾て觀たことがない。て全く無いものと思つて居たに、先年須磨に遊び、源光寺で之を一見し、住職丹治君に乞ふて撤贈さるゝを得

余の喜びは非常なものであつた。前號に掲げた月峯師の法談録序も亦此時丹治君の惠贈せられたものである。泰嶺師の分は須磨赤石の詩である。

須磨浦上作

須磨灘上路。問古思悠々。青草英雄墓。海風暮色愁。

赤石浦上作

鐵錫飄然傍海飛。樹陰沙淨坐忘機。青松久被青潮染。葉々如藍照衲衣。波穩潮平赤浦濱。淡山涵影畫圖新。島中應有神仙寶。欲買小舟浮海瀕。蓋し師は、書も詩も僧樸師よりは少し劣るやうであるが、又何所かに捨て難いよい所がある。右様の先哲の遺墨の話は、ただ、澤山あるが、近來は斯様なものに趣味を持つ人が多くあるまいと思ふにより、此位で止めて置くが、此に一言添へて置きたいのは、一には古人の遺墨は年々に減ずるばかりで、増すと云ふことがないもの故、成るべく保存に注意すべきことと、二には、古人の遺墨は讀んだり觀たりする内、古人の人格風采が偲ばれて、間接に

修養の資となると云ふことである。

三二 病窓閑話

先頃から悪性の感冒に罹り久しく引籠りて居つたので、其の間に別段書物も能く讀まなかつたが、詩が二三首出来た。

世界元缺陷。

人事多拂情。

老來只念佛。

自是和平聲。

身邊和氣藹。

胸裡慈光耿。

念佛如吹簫。

老來入佳境。

右の二首の詩は讀めば意味が分ること故、くどくしく解釋する必要はないが、念佛も何か一つの事に出遇ふと、其時味が出て來るもので、人に依ては或る非常な事柄に出遇ふて一時に信仰に入る人もある。併し吾々はそふいふ事に出遇ふたことはない。小供のうちからしてつめこんだのが、何時の間にか、眞正の物になりて佛の慈悲が尊く有難く頂かれることになつたのであるから、俄に或る事柄に會ふて信仰に入つた人の如く、一時に味が

出ることには餘りないので、それが段々年を老るとか病氣に罹るとか云ふことになると、平生味はれなんだ甘味も追々味はれるといふ譯になる。是は吾のみなならず世間には斯ういふ人が澤山あらうから申さなくとも能く分かることである。

其念佛に眞正に味が出ると云ふと心底が益々平和になりて、丁度寒が明けて春の陽氣に會ふたやうな氣分、昨日まであつた氷も雪も消え失せて、何處ともなく暖氣となり草や木が蘇生て來るといふ譯で、是までは念佛の味の分らぬ内は、世間の事に就て、あれが悪いとか、これが憎いとか、心の中心は氷の團塊や雪の團塊が彼方此方に在て、其が爲に心の温みがどこからどこまでも巡るやうな譯には往ななたが、念佛の味が出ると氷や雪の團塊は全然とけて腹一杯が陽氣になつて來る。右に擧げた前の詩の自から和平の聲が之である。心底の和らぐ所から自然に現はれる聲が念佛である。其と同じやうな詩であるが、今一つ斯ういふのが出來たのである。

事遇乖離動咎人。襟懷冰結解無因。
佛名一唱吹和煦。肺腑回收天下春。
宋の邵康節の語に「天下の春を收め之を肺腑に歸すと云ふことがある。右の詩の結句は其に當つて居る。それはどういふことかといふと、腹一杯陽氣が入り充ちた即ち心底から解けかへつた所をいふ。佐藤一齋先生は、「聖人と云ふものは正月元日の朝起きたやうな氣持である」と云はれた。元日の朝は心底から解けかへつて陽氣に充ち満ちた有様で、腹を立てやうにも立たず、痾癩起さうにも起らぬ。念佛が眞の腹底にある事になると、丁度そんな工合で、元日の朝起きた時と同じく何となく楽しいと云ふ心持である。

併ながら縦ひ信仰あるものも世間の事柄にのみ氣を取らるゝると信仰の側は留守になる。留守になる時は、事乖離にあふて、即ち面白からぬ事に出合つた時には、他人を咎める様になる。彼が悪い、何某は憎いと他人ばか

りを咎め胸の内は全く冷えかへつて氷の如くになつて中／＼その氷が解けない。併し不圖念佛に立ち歸り、一聲の稱名をすると、夫て團塊の氷が直ぐ全然解けて腹一ぱいに陽氣が充つるやうになる。さういふやうな味ひは念佛して居れば一時に其境遇に至ることが出来ぬにしても、追追と味が噛み分けられるやうになる。薩摩芋を噛むが如く漸く佳境に入ると、古語にある念佛も此の通りである。初めの間は甘味もないが、段々念佛する内に甘い味が出て来て終にはやめるに止められぬこととなる。

三三三 佛身佛土の實在

余は宗教としては親鸞聖人の説かれた所の他力淨土門が、少しも間然する所の無い宗教と云ふて宜からうと思ふ。斯様に云へば自分の田に水を引くやうな論鋒で承知が出来ないと云ふ人もあらう。人間の性質なり境遇なり、遺傳なり又は自分の感ずる所なり、實に千差萬別であるから如何な

る宗教でも、萬人が萬人ながら一致して、それを信ずると云ふことが出来る譯のものではない。であるから吾々の云ふ所も人によりては、そんな説は承知が出来ないと云ふ人もあるのは無論の話である。併し宗教と云ふものは普遍的でなければならぬもの、即ち如何なるものにも信ぜられると云ふ性質でなくてはならぬものである。

今日の少し學問のある人から云ふと、眞宗の教義よりもつと哲學的のものが欲しいとか、或は科學的のものが欲しいとか云ふけれども、さういふ哲學的又は科學的のものであれば、或る一部の人の信仰に適するもので、普遍的に如何なる者にも之を及ぼして信仰されることは出来なう。斯ふ云ふと眞宗の教義でもその通り、知識の餘り無い薄志弱行の者―換言すれば弱者だけに適する信仰であつて、學問のあるもの知識のあるものは信ずることが出来ない、と云ふてあらうが吾々から之を云ふと、信ずることが出来ない、のでなく其人が深く自身の心底に於て自己と云ふものと相談し

て考へないからの事である。早く云ふと哲學とか科學とか云ふものに拘束せられ束縛せられてあるから之を信ずることが出来ない。眞宗の教義そのものが眞に信ぜられないと云ふのではないのである。それは何かと云ふと學問のある一少しく知識のあるものでは眞宗で云ふ如き人格的の阿彌陀如來とか或は具體的に有形なる極樂淨土と云ふが如きは、何うしても知識あるものには信ぜられないとかいふのであるけれども深く世界の事を考へて見るがよい。唯學問の理窟ばかりに拘泥するから人格的の阿彌陀さまが變だとか極樂淨土がつまらぬとか思はれるが、そういう學問の束縛を離れ世界の事實の上で深く觀察して見たら滿更信することが出来ない譯であるまいと思ふ。其は何ういふ事かと云ふと今日宇宙間の總てのものをみるに人間より以下に向て小さい小さいものが何處まであるものであるかと云ふに實に無限であると云はなければならぬ。即ち小さいと云ふ事は何處まで小さくなりて居るか殆ど無限であら

うと思ふ。今日は顯微鏡が出来て居るから随分小さいものも分るが、更に度の細かい顯微鏡が作られたら、もつと小さい物が見える譯で、今日最微最小と云ふものよりも尙小さいものがないとは云へぬのである。動物なり植物なり、吾々の肉眼で少しも見る事の出来ない、小さなものが顯微鏡によりて發見せらるゝことが多いのである。又一方から云へば宇宙間の總てと云ふものは幾重にも幾重にも重なり合ふて居ること恰も芭蕉の樹のやうなものである。小さいものの中に尙小さいものがあり、その小さいものの中に更に小さいものがある。いくら皮を剝いても其の下に、又其の下に小さいものがある。要する所人間より以下に向くと無限に小さくなり、無限に小さい間に入り込んで仕舞ふのである。それから推して見ると人間より以上に大きなものゝあることが分かる。人間以下に小さいものが無限であれば、人間以上に大きいものが有限であるとは何うしても云へぬ、斯く考へると人間より大なるものゝ存在を認め

ねばならぬ。植物、動物、其他非情的のものには人間より幾層倍大きなものがあるのである。動物的のものでも身體の人より優れて大きなものがある。特に前世紀の動物と云ふものは實に驚く可き大きなものである。夫れ故人間より以上に向ても無限に大きくなりて來るものと思ふ、左すれば佛が無いかと淨土が無いか疑ふのはつまらぬ小さい人間の知識にくゝられて居るに過ぎぬからである。

併ら現實目に見えないから信ぜぬと云ふのも一應無理からぬやうなるも、目に見えぬと云ふて無いと云ふ事はあるまい。昔は吾々の目に映ずる所を顯界と名づけ、目に映じない所を幽界と名づけたのである。それで地獄や極樂は幽界に入れてあつたのである、けれども顯界幽界と云ふのは何處が分界線であるかと云ふと今日では區別がつけられぬ。顯微鏡の無い頃の幽界は顯微鏡に依つて今日顯界と變じて居る。今後顯微鏡が更に精微を極めて今日以上の顯微鏡を作つたなら、そこに至微至細なものが見出さ

れて、今日の所謂幽界が顯界に入り來る譯である。然し今日の顯微鏡で見られるものは吾々の肉眼に映じないのみで、矢張り物質である。佛や極樂は物質的の物かといふ人もあらう。佛も極樂もある物質である。そのある物質を見る眼鏡を作りさへすれば見ることが出来る、この眼鏡は果して顯微鏡や望遠鏡の類であるか、又は精神的の眼鏡でなくてはならぬか、この振合は異なるも兎に角佛様を見る眼鏡はある事はある。何んな眼鏡かと云へば精神的の眼鏡で之を觀れば佛も淨土も顯界になつて來るのである。斯ういふと、そんな非科學的事を云ふては相手にならぬと云ふかも知れぬが、吾々から云ふとそんな科學に拘られて居るのが氣の毒である。科學とは何れ程の價値のあるものか、佛敎で云ふと互の五官は誠に粗末なものであつて、死んだら消ゆるもの、佛敎で云ふと互の五官は誠に粗末なもの、あると死んで消ゆるものこそ見ゆるけれども、死んでも消えぬといふものは目に見えぬ。吾々の死後又生れ換るとか、極樂や佛があると云ふのは死

んだら消ゆるやうな粗末な五官の上で説くのでは無い。今日の科學で云へば吾々は死んだら消ゆるものに違ひない。佛敎でも消えないと云はぬ併ながら佛敎には未來があり淨土に生れ又は地獄に墮ると云ふは今日の科學でいふ消ゆるものか消えぬと云ふのでない。科學で云ふ消えるものは消え消えた所に消えないものが存して居るのである。そこに後生が出來て來なければならぬ、地獄や極樂が出來て來ねばならぬのである。要するにそれが理會したいならば其を見る所の精神的の顯微鏡か望遠鏡かを作らねばならぬ。自分には之を作ることが出來ぬからそこで信ずることになる。如何なるものでも深く考へて見れば佛や極樂が信ぜられぬと限つたものでない。信ぜんといふのは學問や知識に束縛せられて居るからの事である。

日本佛敎發達の徑路

文學博士 前田慧雲師講演

第一席

日本佛敎が段々今日の如くに發達して來たに就て種々の道行があります。丁度道を行くのも山を越へたり野原を通つたりする様なもので色の道行があります。そこで其道行を話すのであります。全體日本佛敎とは何を指すのかと云ふに私の指す日本佛敎は鎌倉時代に起つた佛敎で其中でも正しく眞宗を指すのであります。こう云ふと私が眞宗であるから何か我田へ水を引く様に取り取る人もあるか知らんがそれは何と思ふても

大事ない、誰が見ても真宗が日本佛教であると云ふことは公平な見方である。其真宗が蓮如上人に至って大に發展したのであるから、其徑路即ち佛教が日本に弘まりてより蓮如上人に至る迄の道行を言ふのであります。夫はどうか云ふ道行を経て来たかと云ふに、學校の教場、研究に話すと随分興味のある問題ではあるが、併し五日間位では學校で話す様な工合に行きませぬから、極分り易い部分だけを大體を取て話すから、充分なる御話はいませぬと思ふ、其邊は豫め御断をして置きます。

偕日本佛教と云ふと其外に支那佛教。或は印度佛教と云ふ様に別々の佛教がある様に聞へるが、さうてはない。元來同じ釋迦如來の説かれた教であるから、其大體の教理には變りはないが、何分佛教は他の耶蘇教の如き單純なる教理を説くものとは違ふて、多方面に涉りて説てあるから、其多くの方面の中で其土地の人情風紀に適合したものが、夫々發達したのであるから、支那や印度に弘まるのと日本に弘まるのとは大體に於ては變りはない

が支那は支那の人情風紀に適合した部分が發達し、日本は日本の人情風紀に適合した部分が發達し、印度は印度の人情風紀に適合した部分が發達した譯である。そこで其發達した邊をさへて、日本佛教、支那佛教、或は印度佛教と云ふのであります。

先づ印度の人情風紀を聊か御話すれば、印度は天然の上からでも人事上からでも、日本や支那とは大分變りて居る。天然の上から云ふと第一氣候が非常に暑い又人事上から云ふと四種の階級が建つて在る上には刹帝利、婆羅門種族があつて下の階級に居るものは是等の上階級者から常に壓迫を受けて非常に蔑視されて居る。斯の如く天然の上から暑さが厳しいので堪へられないし、人事の上から人權壓迫を受けて蹂躪されて居るし、誠に頭の上る處はない。そこで此世は苦しいものである、いやなものであると云ふ歴史的の思想が最も盛んなものであつた。夫のみならず釋迦如來以前から種々の宗教があつて、我々は過去の業因に由りて現世に斯の如き

果を受け、又將來も斯う云ふ果を免かれぬのであると云ふことが常に頭に
あつた様子である、そこでどうかしてこう云ふ苦を脱れたい、生死を出離し
たいと云ふ考へが印度人の頭に盛んに有つて、常に其苦を脱する事を研究
して居つたのである。此の如き印度の人情風紀に適合して發達したもの
が前申しました印度佛敎であります。

次に支那になると地理氣候も變り、又人事上に於ても印度の様に、上の壓
迫を受けること云ふことが少ないのでありますが、支那人は何う云ふものか
以前から理想的觀念が非常に富んで居つて、彼の春秋戰國時代には孔子が
あつて孟子が出て、老子が在りて、莊子あり、楊子墨子、韓非子等の輩が續出して
實に百花爛熳と云ふ様な有様であつて種々の理想家が各々意見を戦はし
て居りましたが、夫より以前にも哲學思想が發達して居りましたと云ふ
ものがあり、又文學の方では詩經などが有つて、斯の如く、理想的觀念に富んで
居る人民であるから、さう云ふ處へ這入り込んで行く、と夫れに適合した佛

教即ち佛敎の理想の側が非常に發達をしたのであります、夫れが即ち支那
佛敎であります。

次に日本はどうかと云ふに、支那や印度とは一種變つた所謂大和民族と
云ふ特長があります。今日の學者の説では種々あるけれど、其私の考へては
日本人は理想と云ふことよりは、何事でも實際に間に合はさうと云ふ考へ
が進んで居て、間に合はぬ空論を吹立てるよりは、直に今日の生活上の實地
に間に合はさうとするのである。昔から今日迄残つて居るものゝ多くは、
他國より傳へられたのであるが、儒學の如きも支那より日本に來ると、其儘
丸呑みにせずして、日本的に間に合ふ様に變化して居るのである。佛敎も
亦其の通りで、總て何から何迄丸呑みにすると云ふ事はない。今日の西洋
の文物でも亦其通りで、總て日本に來ると日本の事實に間に合ふ様に使
かへると云ふのが日本人の特長である。そこで佛敎も單に理論に止まら
ずして、手に入れると直に實際上に間に合ふ様に發達させ、其發達したのを

日本佛敎と云ふのであります。以上申す通り佛敎其物の實體は一つであるけれども、多方面の説き方があ
るから、其中で三國に渡つて各々其土地の人情風俗に適合したものが發達し
たので、其發達した處を抑へて、支那佛敎、日本佛敎と云ふても不都合では無
いと私は信ずるのであります。

そこで佛敎とはどう云ふ事かと云ふに、今日の哲學から云ふと現象論と
本體論と二つが在つて、宇宙萬有を究めて行くのであるが、佛敎は自分と云ふ
ことを本位として、宇宙萬有を究めて行くのである。元來佛敎は自分は何物
であるかと云ふことを明らむるのであるから、宇宙萬有を客觀的に見る處
の哲學とは大に譯が違ふのである。全體自分と云ふものは何であるかと
云ふことを研めねば、轉迷開悟は出來ぬのである。親の腹から出て五六十
年活て居て、又しまひに煙となつてしまふ、其體が何處から出來たのである
か、又肉體と精神とが寄り合つたものであると云ふが、其肉體とは何である

か、其精神とは何て有るか、今日の學問上では或る處迄は明らめては居るが、
其根本本體はどうしても分らぬのである、肉體上では元素と云ふ事も學問
の上では云ふけれ共其の元素が其根本は何であるかと根柢を抑へて見れ
ば、やつぱり分らぬのである。精神も亦其通り何處から出來て、どの様に
なるのかと云ふ事も分らぬ實に御互と云ふものは自分ながら自分の事が
分らぬのであります。すれば迷ひの盡きると云ふことはないので、誠につ
まらぬ譯である。毎日損ぢや徳ぢやと云ふてさはいて居るけれ共、夫れが
何の爲めであるか何うなることかさつぱり分らぬのである。昔から醉生夢
死と云ふ事を云ふが實に其通りである。世間でも自分の目的も定まらず、
身を立つることも知らず家の倒れることも分らずして、青樓に登りて飲だ
り食たりさはぐことのみにて暮して居るものを、醉生夢死と云ふて居るが、
御互も五十年の生活して居る有様を少し眞面目に考へて見ると是から何
所へ落付のか何う云う様になるのか、金を貯へて何をするのか、名譽を得た

と云ふても何の爲めになるのか如何なる位置を得たと何になるのかと、仔細に考へるときは矢張り醉生夢死である。そこで禪宗では自己の事を究明すると云ふが即ち是が爲めである。何の宗旨でも皆其通りて其根本が分らずして腹を立てたり損徳をやかましく云ふたとて大體の根本を調べて見ねばあかぬのである。そこで自分は如何なるものであるかと云ふことを究めるのであるから、佛教は如何なる大きな事を研究しても研究しても皆自分の事の外はない、そこで世間の哲學とは大に違ふ世間の學問では客觀的に萬象を研究するだけ共、佛教は世界の事を研究するも何を究めるのも皆自分は何であるかと究めて行くのであるから、總て自分を本位として研究して行くのである。そこで自分は萬有の一分であつて萬有に關係あるものなれば、その關係は何等の關係であるかと云ふとを研究さへすれば自分も分り又宇宙萬有の事も研究出来る事になる。そこで自分と萬有との關係を研究するに就きて、現象から研究するのと本體から研究す

るのと二つがある。先づ現象の方から自分を本位として、宇宙萬有を研究するとあらゆる現象は皆苦空無常無我と爲る。山にせよ河にせよ其の他草や木や凡てのものが何時も變らぬと云ふものは無い、日々に千變萬化して暫くも止まらぬ、御互の體でも矢張り通り、こうして居る間も時々刻々に變りて居るのであります。其證據に頭の毛でも剃つて一日二日すると、直ぐもう延びて居ると云ふ工合で夫から年が寄つて來ると、終に白く成て來ると云ふ様に何から何に至る迄暫くもじつとして居るものはない。是が無常である。此通りに總てが無常であるから無我であるのである。我がと云ふのは主宰権力のあるものが即ち我である。其主宰権力を持つて居るものが在つたならば、決して無常でない筈である。なんば心に年寄るまゝいと氣張ても年寄つたり死なぬと氣張ても死ぬるのは即ち主宰する権力が無いからである。是が即ち無我である。斯の如くに無常無我と云ふことになると苦と云ふものが付添ふて回るのである、なぜなれば兎角自分は

何事に依らず思ふ通りにしたいと云ふが御互ひの心である。夫れに總てが無常無我と云ふことになれば、何事も自分の思ふ通りにはならない、其思ふ通りにならないと云ふのは、何物か來て變化させて思ふ通りにならぬのである、そこで是が苦となるのである。又是を樂天的に暮せば暮せば事はないが夫は眞の樂天ではない、そう云ふ時は必ず外の何かにまぎらされて苦を苦と思はぬからである。因て其まぎらかす處の物が離れてしまへば矢張苦となるのである。全體人間の順境にある間は苦と云ふことを感じないが、是が所謂まぎらかされて居るので、一朝可愛い子が死ぬとか、商賣して大な損害を蒙むるとか、非常な出來事に出くはして一たび逆境に立つと直ぐにすつぱり厭世的になつてしまふものである。されば何うしても苦と云ふことは免るゝことは出來ないのである。是を免れんとすれば免るゝ處の方法を研究せねばならない、そうならぬと云ふのは苦の考へがないからである、苦の考へがあるとすれば、何うしても是を脱する法を考へ

ねばならぬ。そこになると、それは抑も自分の身體があるから苦を受けるのである、身體さへ無ければ苦と云ふものは受けぬから身體を無くする法を考へるより仕方がない。現象論では是より仕様がなひ處で此身體は何から出來たのであるかと、其本を考へると前生の宿業である物がほしいとか、悪いとか、悲しいとか、腹が立つとか云ふ處の煩惱の報ひに由つて、夫が精神界に影響を與へて生死々々となつて來る譯合である。そうすれば此身體を無くするには、怒りや腹立ちの煩惱を断たねばならぬ、其又煩惱は全體何から起るか、と云ふと、此五尺の身體が我物であると思ふから起るので、我身體が可愛いか、財産が欲しいとか云ふことから起つて來るのである。そんなら煩惱を何うすれば起らぬ様に出來るか、と云ふには、是は周圍に目の付く間は、矢張り目に付くにつけては色々の煩惱が起るから、周圍に眼の付く處では到底心を静めるの煩惱を断ずると云ふことは出來ない、そこで山の奥に這入り込んで修業するより外はない。そこで前申した印度

人の頭には始終暑さを厭ひ上の壓迫を避けんと思ふ處の厭世思想が在つたから山に這入り込んで修業すると云ふことが行はれて現象論なる小乗教法が盛んになつたのである。支那や日本には小乗教はない、印度に限つて發達するのみならず、又其修行をする人も澤山にあつた、勿論大乘はないこととはないが極小部分で、一般は小乗教である、そこで小乗教を印度佛敎と云ふのであります。

第二席

次は本體論是は本體からして現象を説くのであるから、前の現象論とはすつかり違ふのであります。前の現象論では單に表はれて居る物のみに付て云ふのであるから何うしても總てのものが無常無我と云ふことにならな本體論から云ふと現象其物を本體から見に行くのである、是を佛敎では大乘と云ふのである。そこで本體から云ふと天地萬有總て變つたものは

ない、姑らく御互の身體で云ふても、肉體と精神とは二つの様なれ共、奥へ這入ると一つのものとなる、其一と云ふのも二三に對する一ではないので、他に對するものなき絶對の一である。そこで自身の上で云ふと、自身より外のもは更になしと云ふことになるので、太陽であれ山川草木であれ、總て自身以外のものはないのである。こう云ふ工合に絶對と云ふことになると、無常無我と云ふことはないことになる。無常もなく無我もないのであるから、所謂常住である、絶對常住の一であるから、生ずると云ふこともなく滅すると云ふこともない、それで自身より見れば空間的でも時間的でも、自身より變つたものではなく、即ち宇宙全體が自身の外はないのであるから、自身の前の前の其の前、又後の後の其の後を見るも、西の西北の北を調べても、自身の外に何もないのであるから、常住にして不生不滅である。又何處迄行つても其儘我である、其儘樂である、そこで苦空無常無我に對して、常住にして我なりと云ふ、我であるから樂である。例へば物は見様に依て變る

もので彼の朝顔の様なものでも一輪の花に付て云ふときは朝咲いて十時頃には直ぐ萎むからあゝ美麗な花ぢやが惜しいことなあと云ふ。さうすると無常の觀念が起つて來るけれ共朝顔の本来に就て考へたならば此上もなも永い花である惜いどころではない返つて面白いことになる。何ぜなれば初め一輪二輪咲きかけてから秋の彼岸頃迄百日以上續いて咲いて居るのであるから、是程永い花はないのであると云ふことになる。さうなると苦が轉じて樂となり、無常と見しものが常住となる。今現象論と云ふは朝顔の一輪の花の様なもの、本體論と云ふのは朝顔の全體より見た様なものである、本體からして見るときは宇宙の變化は實に面白いもので大層興味のあることである。世間の因果に由て日々に變つてくる有様は實に面白い生死と云ふことも面白くなつて無常と云ふ様な考がなくなり、是迄苦しんだことが却て樂しいことになる。爰が大乗と小乗との違ひて、本體論と現象論とすつかり反對となる、小乗は一輪の花に眼がつき、大乗は根本

に眼がついたのである、世間の變化の苦みも大きな眼から見れば餘程面白い樂い世界であると云ふことになるのである、惟念坊と云ふ人の歌に
來て見ても又來ても同じことちよつとこゝらて死て見ようか
個様な次第で生死と云ふ事も一場の遊戯同様のものとなる。そこで前の現象論で説く所の現象も本體から見ると、反對となるので、即ち前の苦空無常無我と云ふのが常樂我淨となる。事々物々一大乾坤で、草であらふが木であらうが河の中の小石一粒であらうがどんなものにも一切のものが備はつて居るので、何の様な小いものでもどの様な大きなものでも、宇宙天地萬物悉く具わつて居つて何一つ缺けたものはない。夫を華嚴經に重々無盡主伴具足と説かれて、即ち髮の毛一筋の中にも澤山大な國があつて、一時に釋迦如來が顯れて無量菩薩を集めて說法なされると説てある。彼處の池の蓮華の中にも此講筵が開けて居る私がこうして講演して居ると一本の草の中にも講演が開けて居るのである。是は理屈斗りてない事

實^{じつ}が其^{その}通^{とお}である。相^{あひま}は變^かつて居^ゐながら變^かつたものは一つもない實^{じつ}に不思議^{ふしぎ}なものである。依^よつて佛^{ほとけ}が見^みれば是^{これ}だけが迷^{まよ}ひて是^{これ}丈^{だけ}が悟^{さと}りと云^いふ區別^{くわつべつ}はない、我^{われ}々が佛^{ほとけ}を拜^{おが}み、説^{せつ}教^{きやう}參^{さん}りすると極^{ごく}樂^{らく}參^{さん}りの姿^{すがた}の樣^{よう}に見^みへ、小便^{せうべん}擔^か桶^{づく}を荷^お負^おて畑^{はたけ}へ行^いつたり帳^{ちやうめん}面^{めん}控^{くわう}へて算^{さん}盤^{ばん}をはぢいたりする時^{とき}に、顔^{かほ}赤^{あか}らめて損^{そん}ぢや徳^{とく}ぢやと云^いふて居^ゐると地^ぢ獄^{じやく}行^{ぎやう}の樣^{よう}に見^みえるが佛^{ほとけ}の眼^めより見^みれば何^{なに}も變^かつたものはない。是^{これ}は理^り論^{ろん}のみでない事實^{じじつ}も皆^{みな}同^{どう}じことである、こを佛^{ほとけ}は法^{ほふ}華^け經^{きやう}に説^とかれて治^ち生^{せい}産^{さん}業^{ぎやう}皆^{みな}是^{これ}實^{じつ}相^{じやう}と云^いふてある、治^ち生^{せい}産^{さん}業^{ぎやう}即^{すなは}ち自^じ身^{しん}の職^{しやく}業^{ぎやう}を勵^{おこ}し其^{その}儘^{まま}が實^{じつ}相^{じやう}である。或^{ある}は又^{また}一切^{いっさい}法^{ほふ}は皆^{みな}盡^{ことごとく}く佛^{ほとけ}法^{ほふ}なりとも云^いふてある。法^{ほふ}とは凡^{たゞ}て物^{もの}柄^{がら}を云^いふので即^{すなは}ち一切^{いっさい}都^すへての物^{もの}柄^{がら}は皆^{みな}其^{その}本^{ほん}體^{たい}そのまゝの顯^{あら}はれてありませう、云^いふ理^り論^{ろん}的^{てき}なことが支^し那^な人^{にん}の頭^{あたま}に這^は入り、極^{ごく}高^{かう}尙^{しやう}な話^わが氣^きに入^いるのである。因^{よつ}て佛^{ほとけ}教^{きやう}大^{だい}乘^{じやう}の理^り論^{ろん}は印^{いん}度^どでは充^{じゆう}分^{ぶん}發^{はつ}達^{たつ}せなかつたが支^し那^なの天^{てん}台^{だい}宗^{しゆう}や花^け嚴^{げん}宗^{しゆう}に至^{いた}つて大^{だい}に發^{はつ}達^{たつ}して法^{ほふ}華^けの治^ち生^{せい}産^{さん}業^{ぎやう}皆^{みな}是^{これ}實^{じつ}相^{じやう}、華^け嚴^{げん}の事^{こと}々々無^む礙^{がい}の教^{きやう}理^り即^{すなは}ち髮^{かみ}の毛^け一^{いつ}筋^{しん}の中^{なか}にも無^む量^{りやう}の國^{くに}

が在^ありて釋^{しやく}迦^か如^{にょ}來^{らい}が世^よに出^いて無^む量^{りやう}善^{ぜん}薩^{さつ}を集^{あつ}めて説^{せつ}法^{ほふ}なされ、又^{また}小^{せう}き一^{いつ}粒^{りつ}の砂^さの中^{なか}にも無^む量^{りやう}の三^{さん}千^{せん}世^{せい}界^{かい}があると云^いふ樣^{よう}なる微^み妙^{みやく}なることが盛^{さか}んに説^とかれることになりた。そこで支^し那^な佛^{ほとけ}教^{きやう}と云^いふたら此^{この}天^{てん}台^{だい}と華^け嚴^{げん}であると云^いふてよろしいのでありませう、併^{しか}し支^し那^なも實^{じつ}際^{さい}の修^{しゆ}行^{ぎやう}となると印^{いん}度^どとは格^{かく}別^{べつ}變^かはらない理^り論^{ろん}上^{じやう}て治^ち生^{せい}産^{さん}業^{ぎやう}皆^{みな}是^{これ}實^{じつ}相^{じやう}とは云^いふて居^ゐるけれ共^{とも}商^{しやう}賣^{ばい}や農^{のう}業^{ぎやう}が其^{その}儘^{まま}事^{こと}實^{じつ}佛^{ほとけ}の證^{あか}りに契^あうて居^ゐるかと云^いふとそうはいかぬ。宇^う宙^{しゆう}の事^{こと}物^{もの}は皆^{みな}佛^{ほとけ}法^{ほふ}と云^いふけれ共^{とも}實^{じつ}際^{さい}そうはならぬ、そんなら商^{しやう}賣^{ばい}其^{その}もの惡^{わる}いかと云^いへばそうではない、それは佛^{ほとけ}の事^{こと}をしながら佛^{ほとけ}の事^{こと}にならぬと云^いふのは其^{その}事^{こと}をする者^{もの}の心^{こころ}が惡^{わる}いからである。人^{ひと}はどうてもよい、我^{われ}さへ善^{ぜん}ければよいと云^いふ心^{こころ}であるから佛^{ほとけ}の事^{こと}をしながら其^{その}儘^{まま}魔^まの事^{こと}になつて居^ゐる。夫^それを其^{その}儘^{まま}佛^{ほとけ}の事^{こと}になる樣^{よう}にするにはどうすれば善^{ぜん}いかと云^いふに全^{ぜん}く煩^{わん}惱^{なう}の爲^{ため}にさうならぬのであるから、其^{その}煩^{わん}惱^{なう}を取^と捨^すてねばならぬ。其^{その}煩^{わん}惱^{なう}を取^と捨^すると云^いふことになると中^{ちゆう}々^{ちゆう}六^{ろく}ヶ敷^{しき}事^{こと}になる。こゝになると

印度と同様になるのであります。これ等は餘所の話ぢやない、御互ひ面々に考へて見ねばならぬことである。爰には教師もあらうし、袈裟をかけた僧侶もあるし、百姓もあれば商人もあらうから、各々其執る處の職業は夫れ夫れ變はつてありますが、夫れが其儘所謂眞如法性の顯れて働いて居る相たであるのです。それに其結構な仕事をしながら、村が衰頽したり人に害を及ぼしたり、世界に迷惑を掛ける様なことになるのは、如何云ふ譯であるかと云ふに、それは其事柄や物柄は悪くはないので在て、夫れをして居る人の心がよくないからである。物柄はなんぼ善いものでも、扱ひ手が悪いと悪くなるもので、正宗の銘刀でも用ひ手が悪いと却て怪我をする様なものである。自分と云ふ考へから五尺の身體己外のものに身につけ様とするから欲が起るが五尺の身體が己れ計りぢやない、天地萬物即ち眞如法界ぢやと見れば欲も起らぬ筈である。自分は何物であるか、又何處から來たのであるかと云ふことさへ知れば、我身に引付け様の人に頭を下げさせ様のと

云ふ様な考へは起らぬのぢや、そんならそう思はぬ様にするには如何すれば善いか、是は前に戻つて自分の本體を調べ、自分と云ふものは何であるかと考へねばならぬ。夫を考へるには印度流に山の奥に這入つて修行をせねばならぬ。石の上にも三年ぢや考へさへすりや、能く分かる、分らぬと云ふのは自分の心に波が動いて夫が爲めに本當の光りが顯はれぬのである。丁度池の中の水の上に月が宿るが、宿つてもゆがんだり小さくなつたりするのは波の爲めである。御互の心でも損ぢや徳ぢやと波を立て、居るからそれにうつる眞如實相の月も光りを小さくして分らぬ様になるのである。その波をしづめ様とするには山の奥に這入つて修行せねばならぬ。さうすれば、心の波が自然に静まつて自分の光りが明かに顯はれて來る。夫をするには商賣をしたり、妻子をかへたりして居つてはいかぬ、牛肉喰ふことも止め酒を呑むことも止めて心の中を洗つてかゝらにやいかぬ。そこで座禪をやつて心をすつぱり沈めさへすれば總ての事はすつかり分つて來

るのです。そんな事があるものかと云ふ人もあらうが、今日でも現に彼の催眠術の如きものすら頭を洗めてやつてみると、門の外の事や遠い長崎のことでも爰に居ながら分かるてはないか、近頃の朝日新聞に出て居た彼の千里眼のことを御覧になつたてしやうが、彼れはどう云ふ譯であるかと云ふに自分が無心になるので心の波を洗めて無心になればすつかり分かるさうです。成程實際其事を修して見ると何もかも分かるのである。御互も其通りにすれば前生の事も分つて來るに違ひない。印度では今も矢張りこゝろ云ふことは残つて居る、夫れが印度人の特長で禪定と云つて山の奥へ這入て、石の上や木の陰に坐つて、心を練ると云ふのである、さうすれば是まで分らなんだ人も屹度分かるのである。日本でも近頃エツキス光線を利用して居るが、こゝろ云ふことは古來誰も知らなかつたのであるが、今日發明が出來たので、今迄不透明なものが透明に見へる様になつて、人の掌の中の骨が見えたり、皮の袋の中のものが見へたりする様になつた。それから

まだ古來よりなかつたと思つた光りが三ツ四ツ分つて來ました。佛の光明も世間ではギラ／＼したものでないとか、太陽の光りが佛の光明であるとか、光明とは智慧のことであるとか云ふれ共、そうでない本當の光明があるに違ひない、夫れを見ることをまだ知らないのである、是から最少進んだら知る様になるかも知らん、印度の人は精神上見たのであろう。そこで山奥に這入り込んで心を静むれば随分佛にもなれる。處て支那は理論の側は前申す通り非常に盛んで在たが、修行の側は印度より格別發達して居らぬ、禪宗の如きても山に入つて六十年七十年も座禪して一生涯出なかつた人もあつた、そこで修行の側になると印度とは變はりませんのです。日本人となると、理屈の側は餘り得手ではない、そこで古來から日本哲學と云ふものはない、其代りに何物でも手にさへ取れば直に實地に間に合ふ様にして用ふると云ふのが、日本民族の特長であります。

第三席

日本の佛敎は支那や印度とは餘程振合が違つて居る、勿論其本體は變らないのであるが、何だか日本佛敎と云ふとあかしい様ぢやが、其顯はれ工合が變つて來るから、それて日本佛敎と云はねばならぬ。倭日本佛敎が何時から如何云ふ風に顯はれて來たかと申すに、初め佛敎の渡つて來たのは御承知の通り、欽明天皇の御時代である、其後聖德太子の御時代迄は、格別弘まらなかつたのである、元來佛敎の日本に渡つた時は、今の耶蘇敎の這入て來たのとは振合が違ふて、百濟國から我朝廷に献上になつたものであるから、天子様の御物であつた。夫れであるから、渡つた後も天子様の御敎であつたから、一般人民に弘まらなかつた。夫れが聖德太子に至て一般に弘まることになつて來た、是は全く聖德太子の御力である。そこで太子は日本の釋迦如來であると云ふてよい、親鸞聖人の和讃の中に、和國の教主聖德王と

讚嘆せられてある。處が聖德太子が如何云ふ様に佛敎を御扱ひになつたか、又如何云ふ事に御用ひになつたかと云ふに、其御自身の信仰は別段のこととして、日本人民へ御弘めなされたは、如何云ふ思召であつたかと云ふに、夫れは佛敎を以て日本國民の道德を維持したいと云ふ御心である。言ひ換へて見ると、幾らか政治上に御用ひ成されたのである。又外國交際の爲めに御弘めなされたと云ふ説もあるが、是もさう見へる邊もある、支那や朝鮮に佛敎が弘まつて居るから、其國々と交際するに就て日本にも弘めたら便利であらうと云ふ處からである。夫のみならず、内國の國民に國家的觀念を養ふと云ふ思召があつたのである。それは如何して知るかと云ふに、推古天皇の御即位の初めに、三寶を興隆せよと云ふ詔りがあつた。又太子の十七憲法の上にも、篤敬三寶と仰せられてある。是即ち佛敎をして政治の助けとなさしめると云ふ思召である。この憲法は今日の立憲政治の憲法とは違ふて、丁度今の教育勅語の様なものである。其憲法の上に第一番

に以和爲貴とあつて人間は和を以て貴しとするところある世間では調和融和と云ふて物が能く調ひ和ぐるを調和と云ひ物が能くとろけ合ふて一致するを融和と云ふ。人間はこの和が一番大事である。一國の間でも此の和がなかつたなれば下の意志は上に通せず上の意思は下に達せない。さすれば調和が出来難い。一郡一村でも其通りて村長と村民とが心を一つにして衝突せぬ様にして行かねば能く治らぬ。何から何に至る迄世界の事は總て此の調和融和を大切にせねばならぬ。最一つ縮めて御互の心の上に持つて來ても調和がないと治まりにくい。こう云ふと心と云ふものは一つであるのに何ぜ治らんか何んて調和が入るかと云ふにそれは心は一つなれ共働きが幾つもあるからである。先づ學者の云ふ智情意の三つに分けて見ても此の三つが都合よく一致調和すれば人間の總ての事は立派に行はれてゆくのである。され共兎角智慧の方と感情の方と衝突が起るのです。物の道理は能く分つて居ながら感情の方が悪いとつい衝突します。其

れ故學校の教育は智慧の方を能く育てるが感情の側を養はぬからどうやらすると心得方が悪くなつて粗末千萬な行をなすことがあるから人間は何しても智慧斗りてはいかぬ感情が智慧に伴ふて都合よく調和して行かねばならぬ。即ち智慧が殘念がるべからざることを知つたならば感情も殘念がらぬ様いまくしがらぬ様に成ていつたならば人間は立派な行爲が出来て行く。又智慧が酒は呑んでは毒であると知つたならば感情も呑まぬ様に立回つて行けば立派に道德も守つていけるのであります。今日昔に比べると餘程善ふなつて居るのはあるが智慧の方は進んで居て感情の方は共に進まない。そこで智慧に感情が使はれて行く事が出来ぬから道德が益々廢れて來る然るのみならず悪い感情が進みすぎると云ふと智慧が悪い感情に負けて感情の手先となる。そこで智慧が感情を都合よく使つて互に調和していつたなれば善いが悪い感情の方に智慧が負けて手先きに使はれることになる。恐ろしい事になる。今日の道德の衰

へたのは此れが爲めである。そんなら學校で智慧を育てるのは悪いかと云ふに、そうではない、學校で覺へ來たことが、感情を調へることを知らぬ處から却て智慧が悪い感情の手先きとなるのであるから、一方に感情を能く整へて置かぬといかぬと云ふのである。是は日々新聞を見ても能く分つて居る。人を殺しても下手な殺し様をすると直ぐ知れて捕縛せられる、そこでだん／＼智慧が進んで容易に知れない様の中々上手にやる様になる。現に東京の芝五人殺しも今に犯人が分らんと云ふことである。是等は殺した者の智慧が進んで其進んだ智慧が悪い感情の手先きとなるからである。今日詐僞取財杯が知れぬ様に巧にやる様になつたも全たくそれである。こう云ふ悪い側斗りが我々の眼に立つ故、道德が地に落ちた様に見えるが、全く智慧が進んで調和が缺けたからである。兎に角御互いの知識と感情とが善く調和せなければ治まつて行くことが出来ませぬ。それで聖徳太子が和を以て貴しとすと仰せられたのである。是を知らずに規則

や法律を何程拵へた處でなか／＼うまく治まるものではない。そこで規則や法律を拵らへるには、その地場を善くせねばならぬ。丁度俵を挽くに道路を善くする様なもので、如何程俵が善くても道路が悪ければ仕方がない、近來ゴム輪の俵などが出来て居るが夫れでも道路が悪ければ駄目である。因て聖徳太子が爰に眼を付けられて、十七憲法の第一に以和爲貴と仰せられたのであります。處てその調和させると云ふことが又六ヶ敷いのである。學校の教育でも困るのは爰である。その調和の出来る様にするには先づ各個人の胸の中を和らげるのが第一である。夫は如何すれば善いかと云ふに就き、第二ヶ條に篤敬三寶とある。三寶とは佛法僧の三て、寶とは人に福を生ぜしむるもので、ツマリ三寶とは佛教のことである。即ち佛教を篤く信ぜよ、信ぜれば和と云ふことが行はれると云ふのである。其下に註があつて人に尤惡鮮し能く教ふれば化すと書てある。人間はどこ／＼迄も悪いと云ふのではない、佛教を以て能く教ふれば是に化して善人とな

るのである。畢竟信仰がないから心の調和が出来ぬ信仰を以て心を調和すれば悪い人間は出来る筈はない。こう云ふ工合ひに佛教を以て國民の道徳を維持し、世の實際の用に立てようと云ふことは、支那や印度にはないことである。處て其太子の弘められた佛教は如何云ふ佛教であるかと云ふに、印度の様に山に入つて修行する様な法では間に合はぬ。又支那の様には屈斗り云ふて居つてもいかなない。そこで法華經に説かれた處の精神を御弘めなされたのである。今日では法華經は日蓮宗のもの様になつて居るが、此經は何宗にも用ひて居る。桓武天皇が京都へお奠都の時も、法華八軸を鎮するとして、地を掘つて埋めたことがあるさうです。又聖德太子は政治を執り遊さるゝ暇に、勝鬘經を御講釋なされたが、其時は官服の上にて二十五條の袈裟を掛け柄香爐を御持になりてあるその時の講釋が三經義疏といつて今に残つて居る。其三經とは一に法華經義疏二に勝鬘經義疏三に維摩經義疏である。是は御自分が御講釋なされた時の御手控の本でありて、

日本では佛敎著述の始めてあると云ふことである。この三經の中でも法華經が中心となつて居る。是を男たるものが信ずる手本として、維摩經を説かれたのであらう、何ぜなれば維摩居士は在家にして佛教を信じた人である、それで男たるものは誰も維摩居士の様になれよと云ふ思召である。又勝鬘夫人は釋尊の敎を受けられた一國の夫人であるから、女たるものは此勝鬘夫人の如くになれよと云ふ御心から勝鬘經の御講釋をなされたのである。この様に法華經を信ずる人の手本を示されたのである。そこで其法華經とは妙法蓮華經と云ふて、一切總ての物柄は皆妙法蓮華であると云ふ意味である。天然界のことも人事界のものも皆妙法である。少しの穢れもない何とも云ひ様のない、結構な蓮華であるぞと云ふこと、妙法蓮華と仰せられたのである。即ち治生産業皆是實相、商人が店に居つて算盤はちくも、官吏が役所に通ふて事務を取るのも、皆妙法で、即ち此の儘で何も不足なく、天地のありとあらゆるもの皆蓮華である、けれ共佛の眼よりは立派

にそう見へても、我々の眼には奇麗なものもあり穢いものもあるのは、夫は扱ひ手が悪いからである。其事柄や物柄が悪いのではない、夫を扱ふ人の心が悪いのである。五尺の身體を己れぢやと思ふ、から少さい事にも慾を起し、一寸したことに肝癪を立てるのである。佛の眼より見れば是が悪いのは善いのと云差別はない、それであるから己れと云ふ小さい考へを止めて大きくするがよい。彼の不動明王の火の燃へ立て居るのは即ち瞋恚である、あれは一切衆生が煩惱ばかり起して居るを怒られたのが、あの通り燃へ上つて居るのである、其恐しい相が其儘慈悲である、是は怒り方が結構である、一切の衆生が佛の慈悲を知らず佛の命令を聞かずしてたゞ我慾のみを起して居るを憐みて怒の相を現はせられたのである。そこで己れと云ふ考を除けて眞理のまゝに働けば治生産業皆是實相である。維摩居士も空と云ふ考へを本とせられて、自分と云ふ考はない、我病は一切衆生の病より起ると云ふて衆生を救ひたいと云ふ慈悲心より外はない。勝鬘夫人

の十大願も瞋恚嫉妬等の女の悪性を消滅して物を救ひ世を濟りたいと云ふ外はない。總て己れと云ふ考へを捨て、働けば官吏であらうが教員であらうが商賈百姓でも即ち其儘佛法である、一概に山へ這入れの壁に向へとは言はない、働く處のこゝろばへをなせばそのまゝ佛法である、さう云ふ工合に國家社會を心として、自分の爲と云ふ考を無くする様にするには、篤く三寶を敬へと云ふのである、是が聖德太子の御精神であります。

第四席

前刻御話しをしました聖德太子の佛敎は、法華經が中心であつて、それが男子に顯れた手本が維摩經であつて、女に顯れた手本が勝鬘經である。荷も吾人の心が法華經の如くなれば、教員も商人百姓も、そのする仕事も其儘實相である佛の仕事である、それだから維摩居士の如く、勝鬘夫人の如くなれと教られて、御自身もそれを身の上に顯されて、天皇に代りて御政治を御

執りなされ、其官服の儘て袈裟をかけて、維摩經や勝鬘經の御講釋をなされた。是が一般人民の佛教を信ずる手本である。眞宗は聖德太子のまねをして居るのであるから、非僧非俗として僧の様な處もあり又俗人と同じ様な處もある。所謂臨時坊主である。眞の僧侶と云ふのは、出家發心して眞面目に修行する人を云ふのである。眞宗の坊主は町の中に住んで、肉食妻帯して居る處では俗人と同じことである。又法會などになると袈裟をかけ衣を着て、僧侶の服装をする處では僧侶と同じことである。所謂臨時坊主であり、それであるから僧服は時は三寶の中の僧寶の姿たである。其代り俗装の時は敬はねばならぬこともない。惡くともあれば異見もせねばならぬ。彼の坊主はつまらぬ奴ぢやと云つて、袈裟をかけた時も敬はぬと云ふのはいかぬことである。是は僧服に對して尊敬するのであるから、夫を蔑視するのは其形を無視するのである。そこで坊主も其心得て袈裟をかけ、僧服をつけたときは僧寶として、人に福徳を得させる姿であるから、慎まねばならぬ。

のである。眞宗の本堂に聖德太子の御影のかゝつてあるのはこの譯である。ところが聖德太子の姿ではまだ理窟がある何ぜかと云ふに、其眞似の出來ぬところがあります。そこで親鸞聖人になるとすつかり理窟を離れて仕まつて眞の信仰になつて來たのであります。ところで太子御自身の信仰は如何かと云ふに、御自身の信仰は念佛であつた様ではあるが世間に弘めなされたのは法華經を中心として御弘めなされたのであるから、世間の御勧めには念佛はなかつたのである。そこで太子御自身の信仰に就ては歴史に議論のあることであるが、念佛を信じて淨土を願はれたと云ふことはない様である。けれ共大和の法隆寺にある處の三尊佛の光背の銘には、往生淨土と云ふことが記してある。又中宮寺に天壽國の曼陀羅と云ふのがあります。是は通例の曼陀羅と違つて居る。天壽國とは無量壽國と云ふことであらう。即ち極樂淨土の曼陀羅と云ふことであらうと思はれる。それは又奇々妙々のもので、通常の曼陀羅とは違ふて外に類のないものであ

る。丁度龜の甲の様なもの四十八あつて、其一個々に四字宛の銘がある。夫斗りてはない、其外に木もある山もある、丁度まゝと山水の書の様である。そこで其龜の甲を書てあるのは、大方龜は壽が萬年と云ふ處から取つたものであらう、天壽と云ふは此事であらう、又四十八と云ふ數は、恐くは彌陀の四十八願を表したものであるまいかと思はれる、そして其中に世間皆假唯佛是真と云ふ語がある。是れはまだ我國へ曼陀羅の渡らぬ先であるから、極樂淨土と云ふは此の様なものならんと想像して書たものであらう。是は太子が平生極樂往生を願つて居られたから、御薨去の後娘子が父上は今時分は如何云ふ處に御座るであらうかと追憶なされた結果は、こゝろ云ふ結構な處に、往生なされてあるであらうと想像して御書きなされたものであらう、こう判斷すると極樂淨土を御望みてあつたのである、けれ共總ての人に迄及んで居らなんだのである。太子御自身の御信仰の事は、姑く置いて大體申せば篤く三寶を敬ひ、深く佛法を信して、自身現在の禍福は因

縁の然らしむ所と誦め、晝夜佛隨の冥見を愧ち、我欲を起さず勝手を言はず、臣は君の心を體し、子は親の心を體して萬事報恩の心から働けば爰に自ら調和が出来ることになり、隨つて國民の道徳は立派に發達する筈である、此の如く篤敬三寶を以て人心調和の根本とし、佛法と世法とを一致せしめ玉ひしが聖徳太子の佛法である。所ろが此の太子の精神が御薨去の後益々發輝して盛に發達したならば、奈良朝の佛敎も非常な立派なものであつたであらうが、惜いかな、さうはいかなんだ、何てさういかなんだかと云ふに、追々佛敎が弘まつて來たから、寺を建てたり色々佛敎に關する事が進んで來たので、支那や朝鮮の方から僧侶が澤山這入て來て、學者も澤山やつて來る様になつた。又、こちからも留學生が澤山往て互に往來した。そこで支那や三韓風の佛敎になつて仕まつたのである。即ち三論宗や法相宗が弘まつた、さうゆう工合になつて遂に哲學流の佛敎となつて仕まつた。そこで講釋や研究が頻りにはやる様になつて上達したものは、朝廷から僧位僧官

を賜はるとか、或は色の衣を許すとか云ふ様な名譽教になつて信仰や道徳のこと杯はすつかり御留守になつた。唯法要の儀式やら、現世の祈禱杯に心を寄せることになつたので、そこで奈良朝の佛敎は弊に弊を重ねて遂に其感化も威力もなくなり、爲めに國民の道徳も廢頽して上の年貢迄も納めないと云ふ様に亂れて來た。そこで是は如何もならぬと云ふから、政治を改革せねばならぬ様になつた。勿論其時分は政治と佛敎とは聯合して居るのであるから、隨つて佛敎の改革をもせにやならぬ様になつたのである。此時政治改革の任務を帯びて出た御方が桓武天皇である。又佛敎の方の改革の任務を帯びて出たのが傳敎大師で、即ち天台宗を開かれたのである。處て傳敎大師は如何云ふ工合に改革をしたか、又天台宗とは如何云ふ宗旨であるかと云ふに、傳敎大師は聖德太子の佛敎を惹き起して、改革をせねばならぬと云ふことに心着かれた。夫は當時の佛敎は支那流の理屈佛敎であるから、それではいかぬから、聖德太子の大和民族に適する様、日本化して

弘められた佛敎に立戻らねばならぬと云ふことに氣がついたのである。そこで如何云ふ宗旨を弘めたら善いか、如何云ふ御經に依つて弘めたら、日本化した敎が出来るであらうと考られたが、誠に都合の好い事があつて、其頃支那で一旦衰へた天台宗が、湛然和尚によつて當時再興して居つた。そこでそれを調べると、太子の御勸めの法華經を中心とした宗旨である。爾るに其天台の第二祖の南岳の惠思禪師と云ふ人は、聖德太子の前身であつたと云ふことである。是は日本から云ふばかりではない、支那にも云ふて居つたのである。又小野妹子が隋の國へ御使に行つたとき、太子が自身に前身に講じて置いた經が、南岳にある筈ぢやから取て來いと仰せられたこともある。こう云ふことが在て、彼是都合の好いことであるから、是を以て奈良の佛敎を改革しようとして、夫が爲め傳敎大師が態々太子の御廟へ奉告に參られた。其時の詩もあり、序文もあります。そこで一方には政治の改革をし、一方には佛敎の改革をして、日本化した天台を開かれたのが平安朝の

佛教である。

第五席

昨日は奈良朝の末に當つて、佛教が概して何の感化もなくなつて、國民道徳も頹り隨つて政治も滑かに行はれぬ様になりたので。そこで桓武天皇が政治の改革をせられると同時に、傳教大師が佛教の改革をせられたと云ふ處まで御話しました。

桓武天皇が御即位になると間もなく、東大寺の造寺司を廢せられました。奈良朝の頃は朝廷と關係が深かつたから、普請萬端の費用も朝廷から出して居られたが、夫れを第一に廢せられた。丁度其頃傳教大師は叡山に登りて、一乗止觀の修行をして居られたのであるが、其の後間もなく朝廷を山城の長岡に遷され其後亦間もなく京都へ御遷しなされた。處が叡山は山城の鬼門に當りてあつたから、是を王城の守護とせられて朝廷より助力せら

れて、延暦四年に根本中堂を建てられ、其落成式に桓武天皇が御幸なされ、夫れから聊かづゝ朝廷から御賄いになる様になつてあつたが、矢張り勢力は奈良にあつた。朝廷も奈良の關係を薄くして、傳教大師を助くる様にせられ、又傳教大師も眞の佛教を興して大に改革をしようと思ふ心があり、又朝廷にも其御心があつたけれ共何分まだ奈良に勢力があつたので、そうはいかぬ。それと云ふのは、皇室で御法會を御勤めなさると云ふ時になると、叡山だけでは何も彼も萬事整へると云ふ譯にはゆかぬので、矢張り奈良の僧を呼ばねばならぬ。そこで矢張り奈良に勢力がある。處が傳教大師は此時はまだ奈良には反對せなんだ。又奈良の方も傳教大師は法華の學者で將來立派なものになるであらうと云ふ處から頼にし望みを屬して居つた、一口に云へば僧俗共に傳教大師に人望が集つて居つたのである。勿論朝廷も心ろ計りてはない表向きも御歸依になつて居つたのである。そこで遂に勅命を受けて、入唐して學問する事になつた。處が弘法大師はまだ

年が若いし人望も少ないから、黙つて居つては入唐することが出来ない、そこで奈良の方から秀才おやから惜しいものぢやと云つて、勤操と云ふ人が頻りに運動して、遂に是も入唐することになつた。そこで傳教大師は第一船に乗り、弘法大師の方は第二船に乗つて出帆しましたが、弘法大師の船の方が先に着いたから直に長安に行かれた。傳教大師は天台山に行かれて、一年餘て歸つて來られたのである。夫れは國元で宗教の改革をしやうと云ふ責任を負ふて居るから、急いで歸らねばならぬのである。弘法大師はまだ年も若いし地位もない人であるから、長く居つても差支がないから止つて居られた。それ傳教大師は天台山へ行って、道邃和尚に就て法門を開かれたのである。傳教大師は云ふものゝ元日本に居る中に、律宗の祖師の鑒真和尚と云ふ人に學んで居られたのである。此人は豫て日本へ渡つて來たいと云ふ望みを以て來られた人であるが、七遍迄途中で船が覆つたが、とうとう七遍目に日本に渡つたと云ふ非常な熱心な人で、支那の文物は多く此人の持つて來

たもので、砂糖の如きは全く此人が持つて來たのです。佛教のみならず日本文明の恩人と云ふて宜しい。此人は律宗の出ては、あるが學問は天台であるから、天台學が最も得意である。此人に五六人の弟子があつて、夫れも皆天台學者であるから、時々天台の講釋をせられた。其時に天台の三大部の講釋がありましたが、傳教大師も是を聞いて居られて、一渡濟んで二度目の半分頃に入唐せられたと云ふことである。かう云ふ風で國へ歸つて居られたのであるから、長く居る必要もないのである。そこで明の年歸國して、觀山に於て支那で學て來た宗旨を弘められたのである。處が支那にて傳へられたのは天台計りては、なく、當時支那の佛教界の中で、禪宗が四百餘州、到る所皆弘まつて居つた。又傳教大師以前、唐の開元年中、善無畏三藏、金剛智三藏、不空三藏等が密教を印度より持來つた。是は理窟の上も深遠なるものである。理窟のみならず法が付て居つた。そこで支那人の眼には珍らしく、朝廷在野共に大に人心を惹くことになつた。そこで大師も折角支那に往

たのであるから、禪宗も密教も傍らに學んで、まだ其外に菩薩戒と云ふて、梵網經に依つて説く處の戒法、即ち大乘戒をも受て來られたのである。要する所四教である第一に天台第二に密教第三に禪法、第四に菩薩戒、此の四つてあります。眞宗の和讃に、「一心金剛の戒師とすとある、戒は即ち此の戒である。此の四つの教を持つて歸られて、その四つを別々に弘めずして、四宗を天台の下に調和して弘められた。支那ではこう云ふ、工合に四つを一つにする」と云ふことは天台の正統派にはない、爰が即ち大和民族の特性の發揮した處で、全く傳教大師の力らに由つて、四つを一つにせられたのである。そこで天台宗と看板は掲げて居れ共、四宗一致の法門である。そこで密教について申しても、台密東密と云ふがある、台密は叡山で東密は東寺である。何ぜ又さうなるかと云ふと、弘法大師は長安に往つて學んだ密教であるから、混りなしてある。傳教大師は天台の傍ら學んだのみならず、歸りてからそれを調和しやうと云ふ考へがあるから、其學んだ根本からして大に違ふて

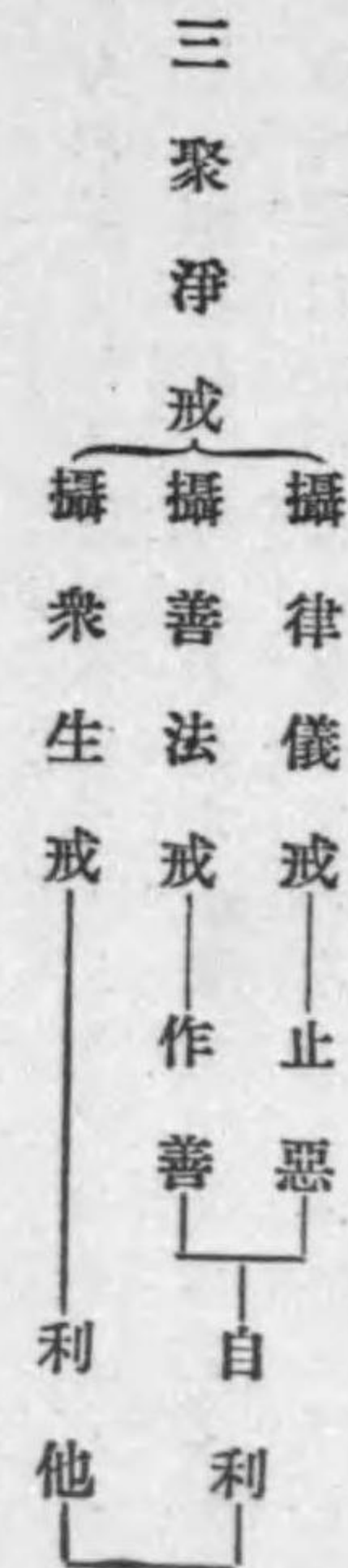
居る。そこでこう云ふ様に台密東密との二つになつて居る。即ち台密は調和の密教で、東密は一筋の密教であります。禪宗も天台宗の一心三觀一念三千と禪とを調和して教へられたから、同じ禪宗と云ふても支那に弘まる禪宗とは異なつて居る、菩薩戒も亦其通り、早く云ふと各々皆活きて來たのであります。さうであるから、同じ天台と云ふても支那とは大に違ふて來たのである。此の如く四教をこね交ぜて一つの天台宗とすると、如何云ふ教義となるか、如何云ふ形になるかと云ふに、教義を云ふと大に面倒であるから、云ふ暇がないが、宗形は實に大乘圓頓戒と云ふものにして押出すのである。即ち傳教大師の精神は、實に大乘圓頓戒と云ふものにして、現今支那大陸に盛行する宗旨である、聖德太子の佛敎と同じ宗旨であると吹聴したのである、言

換れば法華經の精神を以て梵網經の戒を融化し、即ち戒の形體を精神化したものが圓頓戒である。又法華經の精神を梵網の戒形に體現して實際上に活用したるが傳教大師の天台宗である。要するに法華經を活きたものにして立たのが圓頓戒であるから、圓頓戒が即ち天台宗の宗形である。

偕そこて大乘圓頓戒を説かねばならぬが、惜いかな徳川時代になりてから、純粹の支那の天台が来て、悉く支那流の理屈のみになつたから、大乘圓頓戒と云ふものは誰も知るものがなく、書き物なども多くはない様になりました。そこで大體の上で是を話すに付ては、先づ佛敎の戒律から話さねばならぬ、戒律には種々の類があつて、先づ小乗戒大乘戒と云ふ二つがある。其大乘戒に又權門共戒、實門不共戒(大乘圓頓戒)の二つがあつて、權門共戒は淺く、實門不共戒は深いのである。傳教大師は此實門不共戒の方であつた。小乗戒は釋尊が多くの弟子があるから、中には悪いことをするものも出るので、夫れを取締る爲めに作られたので、丁度昔の塾則の様なもの、是れ

も色々に分れる。即ち五戒八戒十戒二百五十戒となる。五戒は誰でも守れる戒で、第一が不殺生戒、是れは在家の守る戒であるから窮屈ではない、ゆるやかにして眼に立つ程の殺生するなと云ふことである。現に遊獵杯の娛樂に物の命を取つてあるくと云ふ様なことはいけない、こう云ふことが今日大抵身を持つた人がやることになつて居るが、少しは慎まねばならぬことである。第二に不偷盜戒、是れは人の物は盗まないこと、第三に不邪淫戒、道にはづれた淫樂をせないこと、第四に不妄語戒、妄言を吐ぬこと、第五に不飲酒戒、是れは酒を慎むこと、養生の爲めなれば少し位は宜し、右五戒は左ほど氣屈なるものでない。其次に八戒、是れは僧侶のまねするものが持つ戒であるから、少し六ヶ敷いので、七日とか十日とか日を定めて、其間堅く守る戒である。次に十戒、是れは沙彌即ち小僧の戒である、次に二百五十戒、是れは本當の僧侶の持つ戒法で、中々六ヶ敷い、水を飲むにも法があり、廁に行くにも法があつて、總て道德上から衛生上にも、十分の注意がしてあつて、是

れを守つて始めて比丘と云ふのである。そこで二十歳になりて始めて此戒を受けさせるのである是を具足戒と云ふのです。是等は皆自分の爲めの戒であつて、自分が罪を造らぬ様にするのである。又心よりは形の上を慎むを重しとする、此は小乗戒である。次に大乘の戒とは釋尊の拵へられたのではない、報身佛として釋尊の本體とても云ふてよい、淨土の佛の御説きになつたので、釋迦如來が取次をなされたのであります。小乗戒と大分性質が異りて居る。併し大乘戒でも權門共戒の方では條則は小乗戒と同じ様である、けれ共心得方がすつかり違ふて居る。今度是れに由りて佛になりた



此の如く攝律儀戒とは自身に於て惡事をせぬ様に身を律する方である。攝善法戒とは善根は如何なる善根もなすと云ふ方である。攝衆生戒とは一切衆生を濟度する方である。此中攝律儀戒は前の小乗の二百五十戒に外ならず即ち形式は權門戒も小乗戒も同一である、ただその持つ所の心がけが異なる迄である。日本では奈良に行はれてあつた傳敎大師以前の戒は權門共戒であつた是が即ち鑒真和尚の持て來られた戒律である。實門不共戒はまだ弘まつてなかつたのであります、實門不共戒と云ふは梵網經にある、十重禁戒四十八輕戒が攝律儀戒となるので、大體の精神も、その形式もすつかり小乗戒とは違つて居る、自身さへ罪造らねば大事ないと云ふのは違ふて、自身は罪造つて地獄へ落ちるとも、人に迷惑を掛けまいと云ふ利他を主とするのである。同じ殺生にても個條は同一でも精神が大に違ふ。自分の罪を造るのがいやである、と云ふてせぬのはなふて利他を思ふてせぬのである、誰ても蚤や虱を殺すことは何とも思ふて居らぬが、彼れが人

間位のものであつたならば、ひねり殺されて中々承知はせない形が小さいから人間にひねり殺されて心に残念であると思ふても仕方がないから、其儘で居るが、若しや虎や狼であつたなら、却つて殺す處でない、此方が命を取られねばならぬのである、してみると形が小さい爲に、あゝ云ふ目に合ふて何ともよう云はぬのである、實に可愛さうである氣の毒なことである、總て他の事を思ふて慎むのである。梵網經には酒は呑むな位ではない、酒は賣るなど云ふてある、人を狂はす水であるから賣るなど止めてあるのである、そこで人に盃を強ひてさへ、五百生の間無手の人に生れるとある、こう云う工合で心に思ふても罪になると云ふのであるから、身體よりは心を主とし、自利よりは利他を主とするのであります。こう云ふと傳教大師はそんなものを弘めて、何うして國民の爲めになるか、如何して活用するか、夫ては商賣も出来ぬではないかと思はれようが、それは如何なものでも守れる様にせられた、それが傳教大師の腕前である。即ち法華經の精神を以て梵

網經の戒を融化した處である。

當時は佛敎歸依者になると授戒せねばならぬと云ふことになつて居た。そこで當時の人は皆此戒を受けたのである、勿論是は形式で丁度本願寺の剃刀式や、耶蘇敎の洗禮式の様なものである。處て此戒を授ける戒壇と云ふ者が三ヶ所にあつた。即ち奈良の東大寺の戒壇、東國ては下野の藥師寺の戒壇、九州ては筑紫の觀音寺の戒壇とてあつて、其地方々々の人民に授戒させたものと見える、是を天下の三戒壇と云ふたのである。其戒を授ける權利は奈良に在り、其以外のものは授けることが出来なかつた。そこで南都の許しを得なければ、弟子を拵しらへることも門徒を拵らへることも出来ぬから、是非共奈良へ行つて來ねばならぬのである。依て傳教大師は叡山にも戒壇を拵らへて下されと云つて朝廷へ願ひ出れたが、朝廷はなんぼ傳教大師に御歸依して御座つても、奈良へ答へずには許されなから、奈良の方へ如何しようかと御相談なされた。處が奈良では承知をせな

い、是に於て奈良と叡山との争ひが起つたのである。叡山の方から戒壇勅許の奏請をした。斯う云ふ譯ぢやから許して下さいと云ふて朝廷へ申上げた。朝廷は是を奈良へ示された。すると奈良は大いに反抗が起つた。依つて朝廷でも議論は尤もとして、戒壇は矢張り許さなかつたので、傳教大師一代は到頭戒壇の勅許がなかつたのである。傳教大師が死なれて後に漸く許された。した。處がさう云ふ六ヶ敷の中を、何ぜさう願ふたのであるかと云ふに、奈良の戒即ち權門戒は小乗と同じく自分を本として居るのである。個人主義である。夫れでは到底國家を護るの、國民道徳を振興するのと云ふことは出来ない。大乘の戒でなければ、國家は護れないから、利他圓滿の戒を以て、國家的の觀念を惹き起させ、皇室を奉戴し、道徳を維持しよう。と云ふが傳教大師の精神である。傳教大師の奏聞は實に立派なものぢや。彼の御維新の頃に國家に盡した人達の考へは、皆我身の出世や何んかを思ふて居つたのではない。國家を如何してとか、皇室を如何うしてとか云ふこと、斗りを考へて居つ

た。彼の吉田松陰の如きは、國家の爲めに大に心配して、遂に仆れた人である。僧侶の側でも唯本山を如何したら善からうかと云ふ心配で、現に爰に來て居られる利井の老人、杯も其一人であつたのである。實に其時分の人達の精神は立派なものであつた。夫て御維新の大仕事も出來上り、今日の文明になつたのであります。處が今日では夫に反對で、日本魂と云ふ君を思ふたり、國家の爲に心配すると云ふ様な誠を盡す人間は少なくなり、個人主義の者が多くなつて、如何したら出世が出來様か、如何したら金が持つてよいかと云ふ様なことばかり思ふて、國の事や本山の事を云ふものには、君は馬鹿なことを云ふて人に悪くされなと云ふ様なことになつて來ましたが、是が即ち小乗戒の根性である。小乗根性では國家は持たない。傳教大師は其處へ目を付けられたのであります。

第六席

前刻御話申した梵網經に説かれた十重禁戒四十八輕戒を悉皆持つた處で具足戒となる斯うなると少し究屈になる。此間も或處で此話をしたら酒屋でやつて来て困つた事になりました酒を賣つてはいかぬと仰せられさすが私は酒屋で御座ります、如何したら善う御座いませうと云ふから明日御出てなさい賣つても大事な様に話すからと云ふた事ぢやが梵網戒の表面丈では印度流支那流であるから日本には間に合はぬ世間道徳の標本にはなりにくい廉がある。それが傳教大師の四宗一致となると法華經を根本として弘むるのであるから法華經の精神を以て梵網經を説くのである、さうすると餘程ゆるみがついて来る。それは法華經の中に此經を善く持つ者は持戒者である、と説いてある。さうすると梵網經の通りにやらいても法華經の精神に契へば梵網經の戒を持つたことになる。其法華の精神とは如何云ふものであるかと云ふと、夫は至極した處で云ふと、己れと云ふ心は微塵もなくなり、小我を没して大我に融するが法華經の精神である。

夫迄にはいかぬ共私利私欲を除けて、大我に近寄つてゆけば法華經の意に叶ふのである。夫に付て法華經に衣座室の三軌と云ふことが説かれてある。

着 慈 悲 衣
坐 忍 辱 座
三 軌 空 室

慈悲は申すまでもない、忍辱とは今日の言葉で云へば忍耐のこと、空は私利私欲をなくすることである。ひくい處で云へば個人的の心を無くして慈悲と忍耐とを行すれば、法華の教に契ふもので、大乘の戒法を持つたものと云はれる。己れと云ふ考がなければ、向ふから無禮なことを仕向けても腹立つ氣遣ひがない、己れと云ふ考へがあるから、己れを馬鹿にしやがつたと思ふのであるから、忍耐は出來ないことになる。慈悲もそうである己れと云ふ考があるから、是丈け出せば貧乏になると思ふ同情はあつても金

が出せぬのである。畢竟己れと云ふ考へなければ慈悲も忍辱も行はるゝ、國民の上で云ふても己れと云ふ私欲を捨て、國家の爲と思ひ人の爲めと思ふて商賣をしたり百姓もすれば都合よく行くのである。此三の軌則に契ふてゆくことになれば法華を修行したものと云はれ大乘の戒行を持つたものとも云はれる是がすぐ治生産業皆是實相となるのであります。なぜなれば私欲我心を離てやるからである。學校の教員を務むるも村の爲なり。農業を勵むのも國家の爲にするのであると思ふてすれば本當の理に契ふことになる其心から養蠶をするとも漁業をすればそれが即ち實相である。是が即ち法華の修行である是が即ち圓頓戒ぢやと法華の精神を以て梵網經を解すると、そう究屈なことにはならぬ。併し如何てもよいと云ふことにすると亂れるから一應は梵網經の説の通りに規定して置かねばならぬ併し夫に拘泥してはならぬ。そこで大乘の法を能く聞かせば日本國民一體に國家的觀念が出来るから是を弘めて護國の基奉公の本

としようと云ふが傳敎大師の精神である。そうなれば國家が益々發達する國家が發達すれば佛敎も隨て發達する要するに佛法と世法とを一致せしめて國民道德を振興し國家を擁護するので所謂佛敎を活かして働らかすのである。

處がそれは結構ぢやが夫れでは叡山の山の中に居ては如何もさう云ふことは出来ぬではないかと云ふには是には傳敎大師に深い考へがあつたのである、こう云ふことは唯だ口先き斗りて云ふて居てはいかぬから事實に行はねばならぬ。そこで道德の堅い人間を拵へて夫を諸國へ配置して今日の學校教員の様な工合に地方々々に居つて圓頓戒を一般人民に説き聞かせて普く全國に及ぶ様にする考であつた、そこで其人間を拵へるには精神修養をさせねばならぬ夫をするには籠山さへねばならぬのであるから二十歳以上の人に十二年の間籠山させて天台行をやるものと眞言行をやるものと二科に分ちて精神を練上げさせて夫れを濟ませたものを國師と

して國々にある處の國分寺へ使はし、其次の者を國用と云ふものにして、毎月三日とか十五日とか日限を定め、人民を集めて説教して聞かせ、又圓頓戒を授けて以て國家的觀念を起させ、道徳を培養しようと思考である。是が其後々々盛んに行はれたならば、日本國民の道徳も立派に發達して、聖德太子の御精神の如く國家も佛教も誠に麗しくなつたであらうと思はれるが、惜しい哉物はさういかぬので、傳教大師が死なれてからは、弘法大師が頻りに祈禱をやつて、宮中にまで眞言院を置ると云ふ有様になり、弘法大師は書は善く出來るし、書は上手なり、精神も善く練て居るし、そこへ眞言宗であるから祈禱をする。處が此祈禱と云ふものは、現在に其印しが現はれるから、朝廷のみならず一般が皆是に心を傾ける様になつて、朝野共に盛んに祈禱が行はれる様になり、た。そうなると思災延命とが家内安全とかだだ、個人的の觀念ばかりで、國家的觀念も奉公的精神も何も在つたものでない、唯自己の福利をのみ祈ること計りになつたのである。こう云ふ勢ひで

あるから、叡山は全く勢力がなくなつて、高野に抗對して其宗旨を維持することが出來なくなる、乃て叡山の慈覺大師が入唐して新しい密法を受けて歸られた。次に三井寺の智證大師も亦入唐せられて、密教を學んで歸朝せられしが、右兩大師が弘法大師の未だ傳へられぬ祈禱をする様になつたから、叡山も高野と對峙して、肩を并べて行くことが出來る様になり、そこで平安朝一代の佛教は、丸て祈禱になつてしまふた。山奥で幾分か修行する人も在たであらうが、表ては祈禱計りであつたから、中頃になると亦奈良朝の如く形式が盛んになつて、精神の方は大に衰へてしまつた。惠慈大師の頃は天台の全盛であつて、此時より追々道徳の側から云ふても、宗教の信念の側から云ふても、兩方ながら誠に心細いことに傾いて來た。唯だ世間的、外面上の威勢が盛んであつた計りて、肝心の信仰や道徳がくづれて仕まい、其後、世界が騒しくなつて、戦争が起る下民は昨日まで頼みにして居つた財産も、戦争の爲に取られ、我家も焼かれてしまひ可愛、我子も打死したと云ふ様

な有様で實に暗黒世界に住む様な氣になり、兄弟があつても、財産があつても頼みにすることが出来なくなつたから、誠に心細い生活をせねばならぬと云ふ様になつたのである。そこで精神上何か確實なものを持たさにならぬことになつた是より先、此の如き趨勢を見抜いて山奥を飛出して城市に出て、念佛を唱へ回つたのが空也上人である。躍り念佛はこの時に始まつたのである。自身一人ゆつくりと唱へて居る時でないから、我身のたよりとするものは、もう念佛計りぢや、我も唱へる人も唱へよと唱へ回つたのである。

叡山の山上では、幾許か眞摯に修行するものはないが、圓頓戒も口の上で云ふて見ると、やはりよい様でも實際になると中々さう實行は出来ぬもので、又戒の形式にゆるみを付けると兎角墮落し易いものである。今日の人間も其通り、口の上では中々立派であるが、事實が行はれぬ。夫は、何ぜかと云ふと、智慧を以て行に融通を付けるからである。智慧と云ふものは丸

いもので如何でも融通のつくものである。行ひは角でなければならぬ、その行ひ丈を四角にやつて居れば善いが、智慧で直ぐに融通をつけて、この時節にそんなことを云ふて居つてはいかぬ、ちつとはこうもせにやいかぬと云ふて、兎角墮落してしまふのである。今の書生が何んど云ふと主義主義と云ふて、己れはこう云ふ主義ぢや、己れの主義は斯ふぢやと云ふて、墮落の言譯にして居る、つまり自分の罪を智慧を以て言譯する。

傳教大師の圓頓戒も一面から云ふと智慧で梵網經の四角な戒律を丸めてしまふたのであるさうなると四角な修行は出来ぬことになり易い。そこで結構な圓頓戒も修養が足らぬと云ふと墮落して、少しの酒は呑んでも善からう、妻も持とうかひと云ふ様になつて、遂に叡山の山上も四角な修行者は少くなつた。彼の空也上人の時代はまだ善かつたが、夫から段々亂れて來て、平安朝の末頃になると、各地に豪族起りて、至る處戰場となつた。世間の人民に在ては、金があつても頼みにならず、家や田地があつても安心して暮す

事が出来ぬ何時命も取られるやら知れぬ、こうなつて見ると何一つ頼りとするものはないことになる。そこで祈禱があるからやつて貰ふけれ共願しがない、夫は其管ぢや酒をのみ大黒を持って居る様な坊主が祈るから却て迷ひを重ねて暗から暗に入つて遂にある物も無くすることになる。こうなつて見ると實に如何して善いか取付處がなくなつてしまつたのである。ただ世間の人民のみならず、叡山の山上でも前に申す如く、圓頓戒を四角に守る事も容易に出来ず、一心三觀も三密修行も中々以て其成就を見ることはならぬ。縦ひ少々は戒をも持ち觀法を修しても生死出離に前途の光明を認めるとは逆ても出来ぬ。胸中は常に不安のみである、そこで追々と念佛が盛になり願生淨土の思想が湧てくることになつた。源信僧都が往生要集を著して、往生極樂の教行は濁世末代の目足なり、道俗貴賤誰か歸せざる者あらん、但し顯密の教法その文一にあらざ、事理の業因その行惟多し、利智精進の人は未だ難とせざれども、予が如き頭魯の者豈に敢てせんやと申されしは

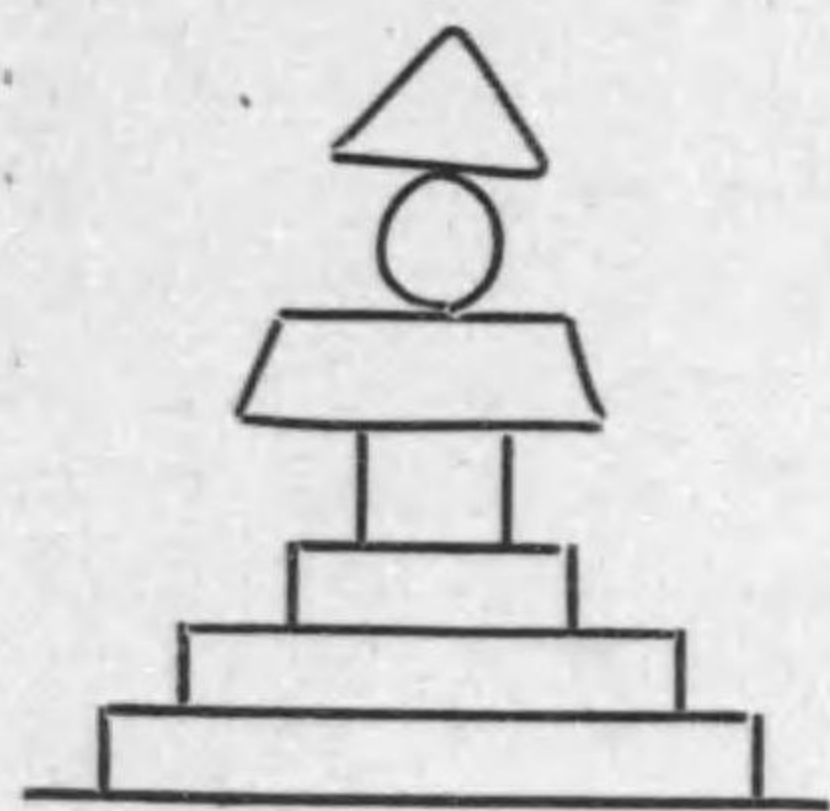
全く右の消息を洩したのである。

一體戒法を受くると云ふことは中々嚴重なことで、前に一往話し置くへき管の處、失念致したれば今少しく之を話すことにする。小乗も大乘も受戒の形式の上では稍違ふ點あるけれ共、大體粗同じ様なことである。先づ大乘の戒を受くるに就て、俗人の上にては左ほど煩はしくないが、恰も本願寺の剃刀式や、耶蘇教の洗禮式の様なものである。然るに僧侶の戒を受ける事になると中々嚴重なことである。此事は教育家も聞いて置いて善い近頃大學に入ると宣誓式と云ふ事があつて、生徒に誓はせるが是も形式に流れて居て何等の功能もないらしい、夫は其管で其宣誓をする人も、立會人も、宣誓をさせる人も、皆無責任である。今佛敎の戒を受くと云ふことは左様なことではない、中々輕々しくは受けさせぬので、先づ戒を受くるものは夫迄の準備を要し、受ける處の器にならねば許さない。夫は如何するかと云へば、第一信仰であつて、自身は佛と變つたものでない、煩惱の爲に迷ふて居

るから凡夫と成たけれ共煩惱さへ除いたならば此儘佛であると云ふ信仰が確立せねばならぬ。佛敎は世間の宗敎とは少し違ふて深遠なる哲學の上に立つ宗敎である。世間の宗敎は神に救はれると云ふ單純なものであるが理論になると徹底せない、その一を擧げて云へば人間と神とは同じものでない、と云ふすると人間が神に助けて貰ふと云ふことが分らぬことになり、助ける救ふと云ふても神にすると云ふことは出来ぬ譯しや、畢竟神の處へ連れて行くと云ふ丈である、私が先年も獨逸の宣敎師に此事を云ふたら、神と人と同じものと云へば萬有神敎になるから、さうは云はれぬと云ふて聞かなかつた。佛敎の側は一面から云ふと、萬有神敎にして、一面からは神敎である、一切衆生悉有佛性、御互ひも本體は佛と別に變つたことはない、此の腹を立てたり欲を起すことが、即ち其儘佛性である。諸の惡其儘心さへ變へたならば佛になることが出来る、其佛性を持ながら我々は迷ふて居るのである。十方法界がこの儘我心、天地宇宙其儘が我身である、此の如

く大きなものを我等は小さきものとして居るそれが所謂迷である。其迷即ち惡い習慣から五尺の身體のみを己れぢやと思ふから窮屈になり、自身外のものが出来てくる。此心即ち是れ佛なりと悟れば、自身外のものは一としてない、宇宙法界皆我身である。此の如き妙理に於て信仰が立た處て爰に始めて修行が出来るのである。何か知らぬけれ共、一云ふから一寸やつて見やう位では眞面目な修行は出来ぬ、此を以て佛敎の修行は、天台でも華嚴でも先づ自身佛になれると云ふ信仰が立たねばならぬ。その信仰が立つと共に懺悔と云ふことが自然に起つて来る、是迄成した惡いことを惡かつたと愧る心が起る、元と我々の自性はかゝる小さいものではないのである。それに己れがく、と我執して小さくしてしまつたのである。此の五十年の身は丁度水の上の泡の様なものである。其の泡に執着して金を拵へやうの名譽を得ようのと飛回つて居るのは、誠に心得違であつたと後悔する迄に至るのである。其の愧づる心が起り、毛の孔から血を出すほど

後悔心が起ればそれにて心底の垢が掃除せられて無垢清浄になる、そこで始めて戒法を受くべき器となられるのである。偕戒を受くには戒壇と云ふものがある。傳教大師以前は奈良の東大寺と下野の薬師寺と筑紫の観音寺と三戒壇があつた。其處へ行つて戒を受けたのである。叡山では傳教大師が入寂せられた後至て戒壇を立つる事を許されたので、今でも戒壇堂がある、それは何う云ふものかと云ふと、左圖の様なもので、壇の上に多寶塔がある。塔の中に釋迦如來と多寶佛とが安置してある。要するに此戒壇に於



て戒を受くことになる。傳戒師として如來の代官として戒を傳へて呉れる。即ち授けて呉れる人である。次に教授阿闍梨、次に羯磨阿闍梨、此の三人があつて、此外に七人の證明者が列席する。此等の人は皆戒を授くるにも又證明するにも飽ませて責任を持って呉れて、戒を受ける者も勿論一生、戒を守りたいと誓ふて、誠に嚴重なる心で受けるのである。其時傳戒師が汝盡未來際殺生戒を持つや否やと問ふと、其時は實に何とも云へぬ心の底迄徹する。そこで持ちますると答へても、一遍では許さぬ。三遍まで確めて彌々持ちますると云ふた處で、所謂戒體が成就するのである。一口に云ふと、道德的威力即ち防非止惡の力が起る。其戒體に就ては専門では色々六ヶ敷議論もあれども、大乘圓頓戒から云ふと、佛智回向の力であると云ふ。佛が其處に實際降臨せられて其前受けるのであるから、傳戒師が取次ぐ處の佛の御言葉に依て汝盡未來際殺生戒を持つや否やと云はれたとき、其佛の御言葉と共に形も心も一所に頭の中へ浸み込んでしまふから、一生涯忘れら

れぬ、何時思ひ出して、其思ひ出す度毎には、體もちぢむ様に感ずるのである。言葉や意味合は平凡なれ共、それが自身の頭の底迄浸込ひと、こう云ふ顔で、こう云ふ言葉を授けられたと、一生涯忘れることは出来ない。御互でも親の異見とか遺言杯を受ける時には、言葉は何でもない様であるけれども、私の死んだ後も親の顔を汚さぬ様にやつて呉れと、苦しい病の中からこう云ふ顔して、こう云はれたと思ふから忘れられぬ。教師と生徒間に於ても亦同しとて先生の云はれた言葉や形やら其時の模様を思ひ出すと非常の力がある、そとて先生の言葉も顔も生徒の頭に浸み込む様に云ひ聞かさねばならぬ。それが平生から信じて居らぬ先生の言葉である、と平氣に聞き流してしまふ。そこで平生から先生には信用がなくて、はならぬ、さうでなければ假令修身科の事を云ふた處で何の役にも立たぬ。全體修身教科書などと云ふものは實際役に立つものではない、具原益軒はこう、二の宮尊徳はこうである、と云ふ丈は覺へて居るが、實際の効果が無い。そこで先生

の顔付から言ひ方迄、生徒の頭に浸込む様に注意せねばならぬ。大乘圓頓戒もそれと同じこと、心の上に悪い事をしてはならぬと誓ふたことを思ひ出すと、出した手も込引む様になる、是が佛の御形と御聲が心の中に寫つて居るのである、是が佛智回向の力である。こう云ふ様な嚴重の物柄であるから、是を眞面目に實行する人は効能あることなれ共、受けるものも授ける人も唯形式に流れてしまふては何の効力もないことになる。依て慈悲忍辱空と云へば言葉の上では容易なれ共、心底から私利私慾を除けることは中々出来ぬ。そこで大乘圓頓戒も後世には効果のないものになつた。唯前に申す様な嚴重なる儀式に依る僧侶の受戒さへさう云ふ有様なれば、况や俗人の受戒に於てをやである。遂には息災延命の祈禱にのみ趨ることになつた。其祈禱も弘法大師の頃は善かつたが、後代無徳の坊主の祈つたことは何の験しもないのである。そこで精神上に何のたよる處もなく、唯もう其日暮しになつてしまつたから、如何しても爰て一大安

慰の力を見出し、何か確實なるものをつかまさないやならぬ。そこで空也上人が飛んで出て、念佛を唱へ出したから、我も人も唱へる様になつた。空也のみならず山の方でも横川の源信僧都、此方は天台宗の人でありながら往生要集と云ふものを著述されて往生極楽の道は念佛より外はないと頻に念佛を勧められた。そこで叡山もすつかり念佛になつてしまふた。さう云ふ風になつたから、念佛と法華とは違ふたものではない一つぢやと云ふことになり、法華が即ち念佛、念佛唱ふるが即ち法華經を讀んだのぢやと云ふことになつた。念佛共儘法華の修行をして居るのぢやとは都合の好い事であるがどうしてさう云へるかと思ふに、それは密教の上には法華は觀音の法門である。觀音菩薩が成佛して彌陀となられたと云ふ。そこで法華經の教は阿彌陀佛の教であると云ふことになる、法華の妙法とは佛の智慧である。佛の眼て見た世界は皆妙法蓮華である。一切萬物皆妙法蓮華にして一點の穢れもなく、世界皆清淨のものである。夫を佛の慈悲の上に持

て來て顯はしたのが念佛である。智慧の法華から云へば、一切萬物皆眞如法界なり、人間とは云へ共佛の眼より見るときは佛である。依て六十年の命も佛の眼より見たまへば六十年で盡きるのはない、盡未來際の命である。人間その儘眞如法界宇宙徹底の大壽命で宇宙法界自分と云ふ大落付が出来ぬ。出沒生死は泡の如くて、本性は水の如くてある、依て横も縦も盡きぬ。盡未來際不生不滅であるから、死神貧乏神がつかふが、夫に心を取られぬ様になる、是が法華の智慧の悟りである。此の智慧を慈悲へ持て來て顯したのが念佛であるから、南無阿彌陀佛を得れば法華の智慧を佛になる如くに念佛の慈悲にて佛になるのであるから、一口に云ふと念佛て悟つたのも、法華て悟つたのも結果は同じことであつて法華即念佛、念佛即法華である。

第七席

前刻御話申した通り、叡山では法華と念佛と調和せられて一つになつたから、法華を修行する替りに念佛唱へる事になつたので、念佛することが盛んになつた。處が中には頑固なものがあつて法華は法華である念佛は念佛である。阿彌陀佛に南無をつけて唱へるなら妙法蓮華にも南無をつけて唱へたら善いではないかと云ふ説が起つて來た。日蓮宗の根源は此から出來たのである。又法華と念佛と一體ぢやと云ふと念佛唱へるのも法華の心を以て唱へねばならぬ。然るに我々凡夫の胸の中に起る心は佛の心には叶はぬ依て凡夫の心を拂ひ除て、無念無想になつて唱へよと云ふ離三業の念佛と云ふが出て來た、後代の時宗は此より出たのである。要するに法華と一致する念佛は理想的である、純自力的である、骨の折る念佛では到底眞の安心に住することは出來ぬ。源信僧都の唱へられた念佛は右等の如き理想念佛ではなく、支那の善導大師の念佛であるから、凡夫の考へを除けてかゝらねばならぬと云ふのではない、凡夫そのまゝ佛の願力に依

て助けられると云ふのである、即ち他力の念佛である、是てなくては眞實究竟の安慰は得られぬ、然るに僧都は山の中でやつて居られたのであるから、世間には餘り廣くは弘らんなんだのである。源信以外の人で善導流の念佛を受けた人は、東山の永觀堂の永觀律師、其外諸宗に涉て數人があつたけれども、善導の念佛即ち慧心僧都の勧められた眞實の精神を得たものは甚だ少なかつた。其眞實の精神を得られた人は、法然上人である、法然上人は天台を離れて吉水に隱居して、慧心僧都の往生要集の心を得られて、善導大師の二種深信の釋に由り、純粹の他力念佛を勧められたのである。即ち念佛で往生すると云ふのは、念佛は佛の願力である、佛の慈悲の結晶である、我等凡夫は、佛力のみで即ち慈悲によりて凡夫此まゝ救はれて淨土往生を得るのであると云ふ極めて暖かき心の底まで融け返る様な念佛を勧められたのであるから、あちらからもこちらからも人が集まつて來て、遂に門前市をなすと云ふ有様になつて來た。それは勢ひさうならねばなら

ぬと云ふのは當時は前申す通り天下到る所争亂の世の中であるから。財産があつても家があつても何に一として頼みにならぬから一般の人心に不安が入り満ち居るのである。そこへ法然上人が念佛一行で極樂往生を遂ぐるぞと、他力念佛を勧められたのであるから勢ひ盛ならざるを得ない。僧俗皆是に歸する事になつたのであります。然るに法然上人の念佛は結構ではあるが、まだ全く佛法世法一致して生活そのまゝ佛法と云ふ譯にはいかぬ邊がある今日こうして暮して居る儘で佛になると云ふ迄にはなつて居らぬ。教を聞いて居れば煩惱の有る儘と云へ共矢張り生活を離れた邊がある。何ぜかと云ふと法然上人御自身の上にも、口に念佛しながら日想觀もして念佛は稱へ通しなり。身は聖僧で居られるのであるから、其教を聞いて居ると心易くて誠に結構であるけれ共御身の行狀を見れば殊勝であるから、本當に難有なつたら法然上人の様にならねばならぬであらうと思ふから。如何しても日々の仕事をして居る其儘が佛の仕事をして居るの

であるといふ處の聖德太子の御精神を眞裸かにする處迄には行かぬ。そこが親鸞聖人になると、聖德太子の御精神を眞裸かにし大乘圓頓戒を赤裸裸にして願力一つで往生するので。世間其儘であると打出されて而して凡夫其儘と云ふことを御自身の形の上に顯はされたのである。依て御身に召されて居つたものはと云ふと、黒衣黒袈裟であつた。其當時は僧服と云ふと皆色衣であつて赤の衣や青の衣を着る事になつて居つて、黒衣と云ふと誰でも着たのである。丁度今日の被布の様なものであつた現に清盛杯でも着て居たのである。さうして妻もあり子もあり酒も呑み魚鳥も食せられて世間の人とは更に變つたことはない。念佛も稱へ通してもない、居られる處も本堂をかまへてぢつとして居ると云ふてもなく扶風馮翔處處に移住すると云ふ有様で。何から何迄世間の人間と少しも變らずして、彌陀の願力に助けられるゝ事の嬉しや尊とやと報謝の上から念佛して喜び人を教導せらるゝのであるから佛法と世間とは一寸も離れぬのみならず。

法華に言ふ處の慈悲忍辱空と云ふことも自然に修せらるゝことになる。夫れは何ぜかと云ふと己れを忘れてあら嬉しや尊ふやと稱ふる處に自然に我と云ふものはなくなる。是が即ち空である。彼の人も誘ふて參らせてやりたいたい安心させてやりたいたいと云ふ慈悲心も顯はれ自身はこう云ふ淺間敷いものであるのに命終次第此處で願力に助けられて往生するのであると思へば忍耐も出来る様になつて實際に大乘圓頓戒が行はれて来る。何ぜ又さう云ふ工合になるかと云ふことは信ぜられた人達は自分の身に考へて見なさい。此身は眞に落ちる身である。決定すれば其落ちる身を此儘なりて御助け下さる事と信ずる上はどれ程嬉しからう。併しこう云ふ事は何ともない平氣な人間には分らぬが眞に信ぜられた身になつて見ると。是れ一つが取損へば誠に大事であるのに仕合せなことになつたと云ふことになれば唯だ難有と云ふ一つである。爰が御恩報謝である。あら難有やあら尊ふやと思ふ心の口に出つるを南無阿彌陀佛と申すなりと仰せ

られた蓮如上人の御言が爰である。こうして稱へやうのあゝして稱へやうのと云ふ考へはない。唯自然に心底の喜が顯はれて来るのである。そこになつて見れば自分の爲めにしやうと云ふ考へは毛頭起らぬ。如何うしたら佛様の御心が休まるだらうと思ふ心から唯如何なる事に出合しても佛の仰せならしましやうと云ふ心になり、又人の身の上に就てもあの人には足元に火が燃へて居るが實に氣の毒なものぢや、早う聞かしてやりたいたと云ふ感じが起つて来るから同情も世間並の同情とは大に違ひ、一層切實である。假令向ふが腹を立て、向つて来る事があつても、夫れに心を懸けず却つて氣の毒に思ふ心が起つて来るから、決して逆らひ杯はせぬのみならず向ふを慰めてやるから、遂に向ふも此方に靡いて来る様になる。それを和讃には願作佛の心は是れ度衆生の心なりと申されたのである。難有いと云ふ心には穢れた處は一寸もなく眞に清淨無垢の妙法蓮華である。妙法蓮華とは譬への事であつて、今までは餘所のことぢや人のことぢやと思ふ

て居つたが。念佛して喜ぶ身になれば妙法蓮華が即ち我身である。依て正信偈の中には人名芬陀利華と申されてある。さうなつたのが眞の法華の修行である、そこで眞の佛法は親鸞聖人の他力念佛に依て始て顯はれたのである。大乘圓頓戒も法華經の眞意も、理窟を離れて事實の上に現はれて來たのである。所謂治生産業皆是實相、一切總てが其儘佛の仕事となることになつた。それであるから蓮如上人に至つては商ひをもし、奉公をもし、漁獵をもし、斯る淺間敷いものを本として救ひまします彌陀如來の本願ぞと、深く信じて報謝の念佛を稱へて日暮せよとも又朝夕は如來の御用と思へとも、又一盃の水を飲むも佛の御用で商ひするの佛法の用事と心得よとも申されて世間佛法少しも離れたものにはならぬことになつた。是れは印度にも支那にもこゝ迄に顯はれて居らぬ、日本に來て始めて事實の上に裸かになつて現はれたのである、是れが日本佛教と云ふのである。

已上述べたる所は拙著天台宗綱要東洋大學出版の附録日本佛教の大系

を更に敷演したものである、依て右の一篇を参考せられたし猶又傳教大師の佛教に就ては是又右天台宗綱要附録の日本天台の淵源と云ふ一篇を参照せられんことを望む。

佛 教 思 想 講 話 終

大 正 貳 年 六 月 廿 日 印 刷
大 正 貳 年 六 月 廿 三 日 發 行

定 價 金 壹 圓 貳 拾 錢

著 者 前 田 慧 雲

發 行 者 東 京 市 本 鄉 區 元 町 貳 丁 目 參 拾 番 地 石 田 彥 三 郎

印 刷 者 東 京 市 京 橋 區 新 富 町 三 丁 目 二 番 地 小 泉 重 助

印 刷 所 東 京 市 京 橋 區 新 富 町 三 丁 目 二 番 地 日 新 印 刷 株 式 會 社



發 行 所
發 賣 所

東 京 市 本 鄉 區 元 町 貳 丁 目 參 拾 番 地 振 替 口 座 東 京 壹 五 七 八 〇 番
東 京 市 日 本 橋 區 飯 倉 町 參 番 地 振 替 口 座 東 京 四 五 五 四 番

中 央 書 院
明 文 館

森田悟由 禪師題字
新井石 禪師著
禪學入門
好評三版
定價七錢 送金八錢

醫學博士 二木謙三氏序
東洋醫學會編
實驗健康法
好評再版
定價六錢 送金八錢

高橋五郎 先生著
基督活殺論
好評
定價九錢 送金八錢

加藤咄堂先生序
江部鴨村先生著
說釋迦一代記
新刊版
定價九錢 送金八錢

本書は禪界の驍將新井石禪師が、其獨得の廣長舌を振ひ、極めて平易に禪道入門の路を説き開き、因縁あり譬喩あり、趣味津津の中に禪學の妙所に到らしむ、請ふ精神の肌渴を訴ふる者は、速に來たつて本書に參ぜよ。精神の

東朝日新聞評 縱横無盡に禪定の實踐的方面の通俗的たる書にて吾人の身心鍛鍊上無上の法門なるべし。
本書は實驗の心身強健法にして、其方法は極めて簡易にして偉效可驚も、肺、心臟、胃腸を病者に是れ奏効顯著 不可思議の感あり、請ふ病者健者を問はず何人も此の快著に依て健康の勝利者たらん事を。

本書は基督の生涯、説教、奇蹟、死刑、殉教者の迫害、火刑、磔殺、暴君ネロ皇帝の惡非道、悲劇又悲劇を極むる所最も興味ある文字のみ羅列す。
附録………基督教會發達小史

世評一斑
報知新聞 佛陀の光輝ある一生の歴史を趣味ある筆にて平明に説述せるもの。一讀以て八萬四千の法門に乗ずるを得べし。
新聞 白色の大象以下四十三節に分けて専ら人格の典型としての釋迦が一代を趣味ある美し
國民新聞 い筆に物語つて其の間にも奥妙幽玄なる教學
新新聞 哲理にも言ひ及んで何人にも理解し易きよ
う努めたのは嬉しい。

最新刊

處

世

講

話

大判布製函入美裝
正價金壹圓貳拾錢
五千部限特價提供
金壹圓送費金八錢

姉妹編

如何に世に處すべきが、これ人生喫緊の問題、本書は著者得意の快
辯を以て縦横にこれを説述し、穩健の思想を以て自在に此難問題を快
解決す、豊富なる資料趣味ある話材を以て人事萬藤の中に一道の光
明を認めしめたるもの、處世の要道人生の機微説て悉さざるなし、
請ふ一本を購ふて世を渡るの指針とせよ。

好評

修

道

講

話

大判布製函入美裝
正價金壹圓貳拾錢
五千部限特價提供
金壹圓送費金八錢

加咄先新
藤堂生著

世評一斑

報知新聞 上中下の三編に分ちて道を修むるの法を講ず好個の修養書なり。
東京日々新聞 世間既に定評あり愈々説て愈々深く多々益々辯じて而も其興
趣長く娯みず之れ居士の書の益々多く出でて益々江湖の歡迎を受くる所以なり、
本書はやはり居士の佛教思想を基となし古今の詩歌典籍を引き逸話を網羅し、
極めて但耳に入り易きやう修道の法を説けり。
東京時事新報 よく談じ、よく叙する著者が修道に關する講話を統一的に編
述したるものである。編を上中下の三編に分ち求道の精神より説き起して、修道編
の道程宇宙觀、人生觀、生活趣味等に及び、更に道と云ふことより、人の心、煩
悶と社會、宇宙觀、人生觀、生活趣味等に及び、更に道と云ふことより、人の心、煩
悶等に互れる、亦一部の讀物とすべく、装幀も悪しからず、印刷もカナリに注意
されて居る。

324
347

終